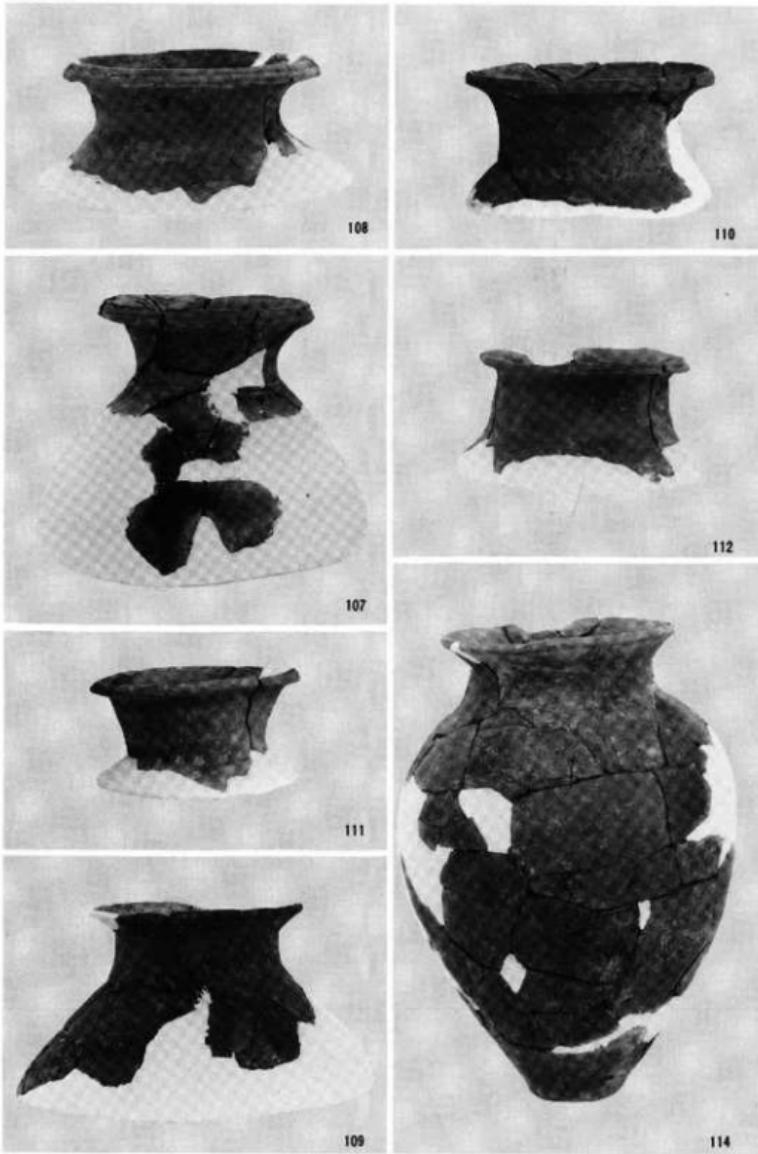
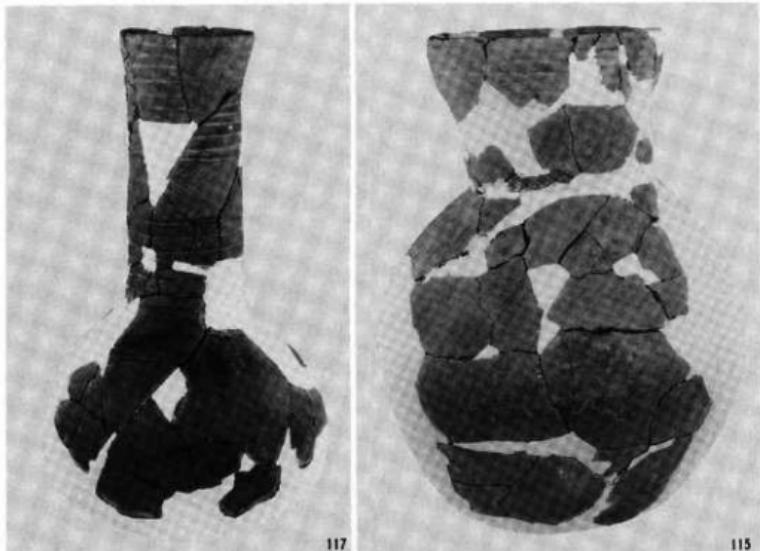


出土遺物 (4)

圖版16

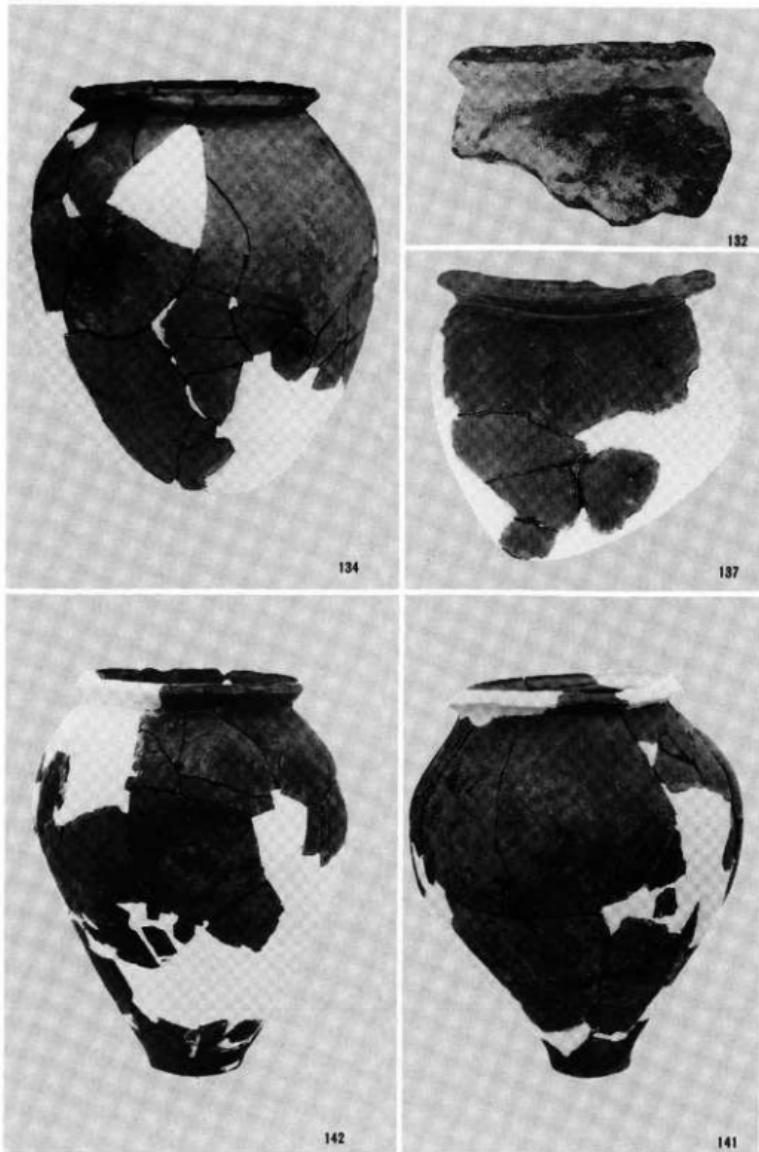


出土遺物（5）



出土遺物 (6)

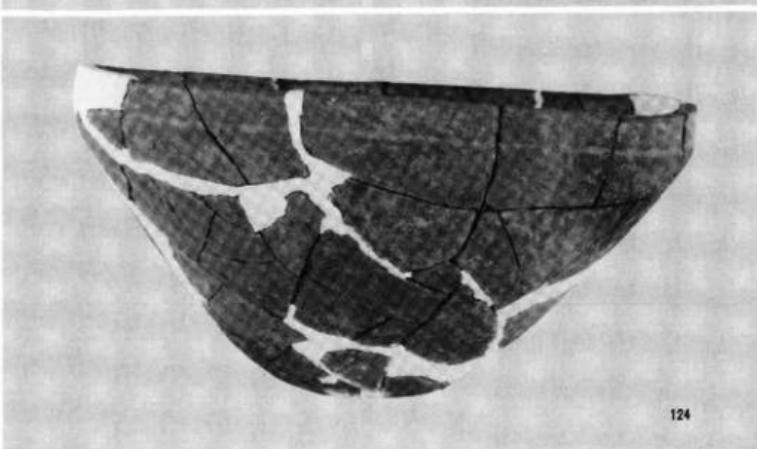
図版18



出土遺物 (7)



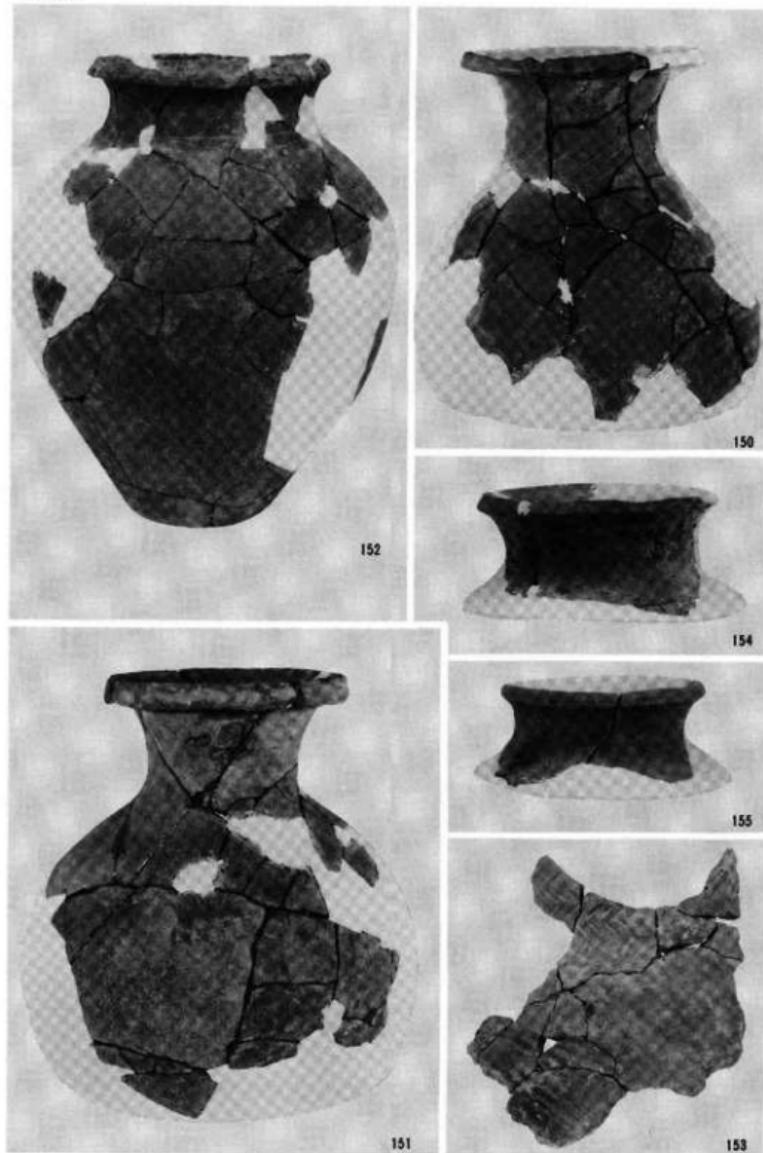
125



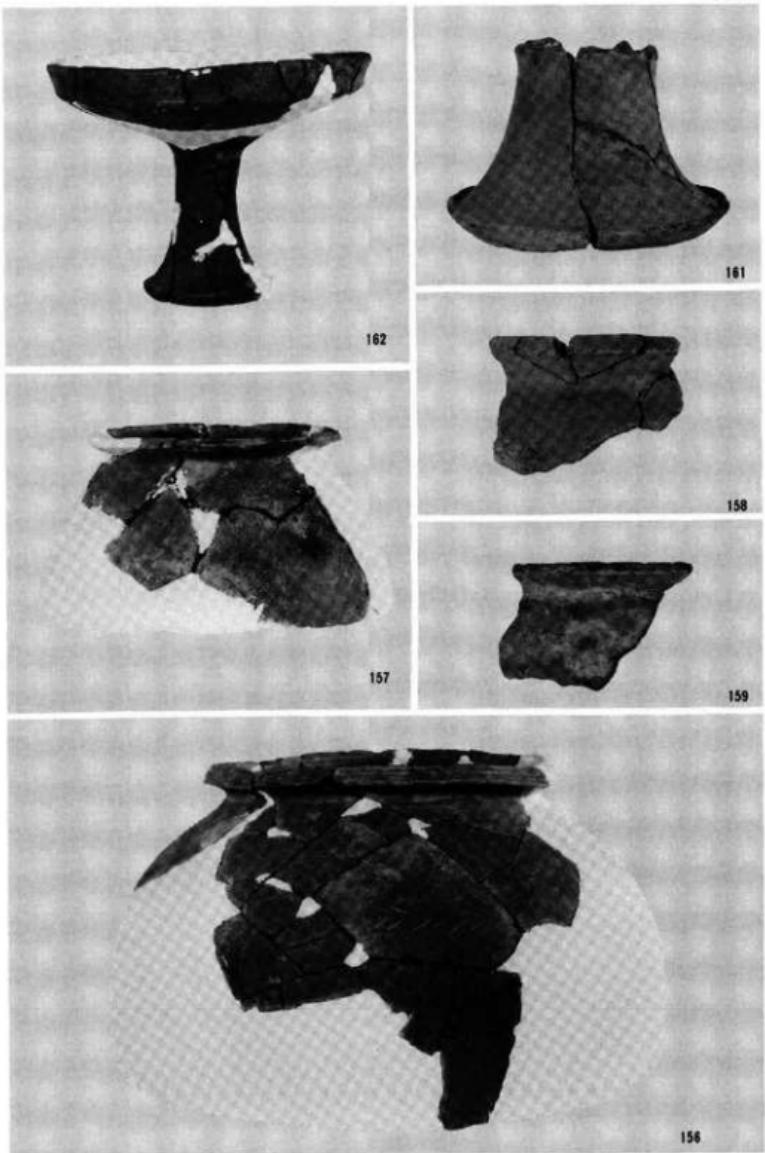
124

出土遺物 (8)

図版20

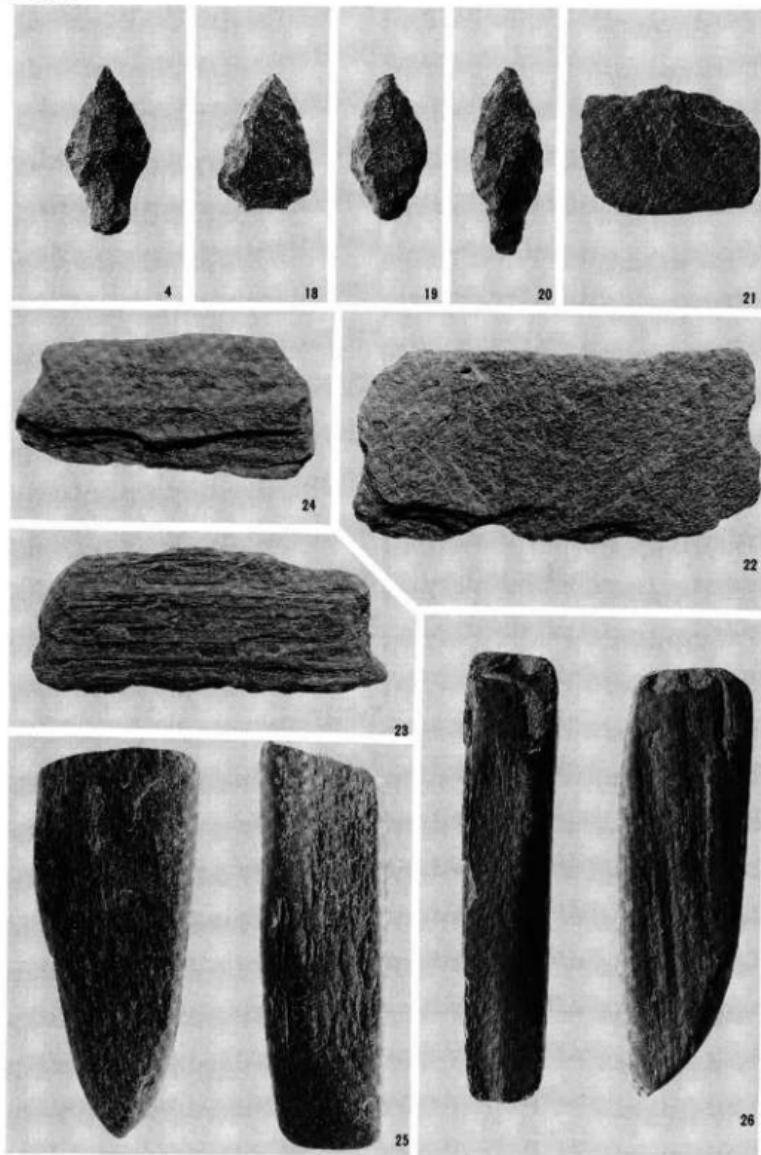


出土遺物 (9)



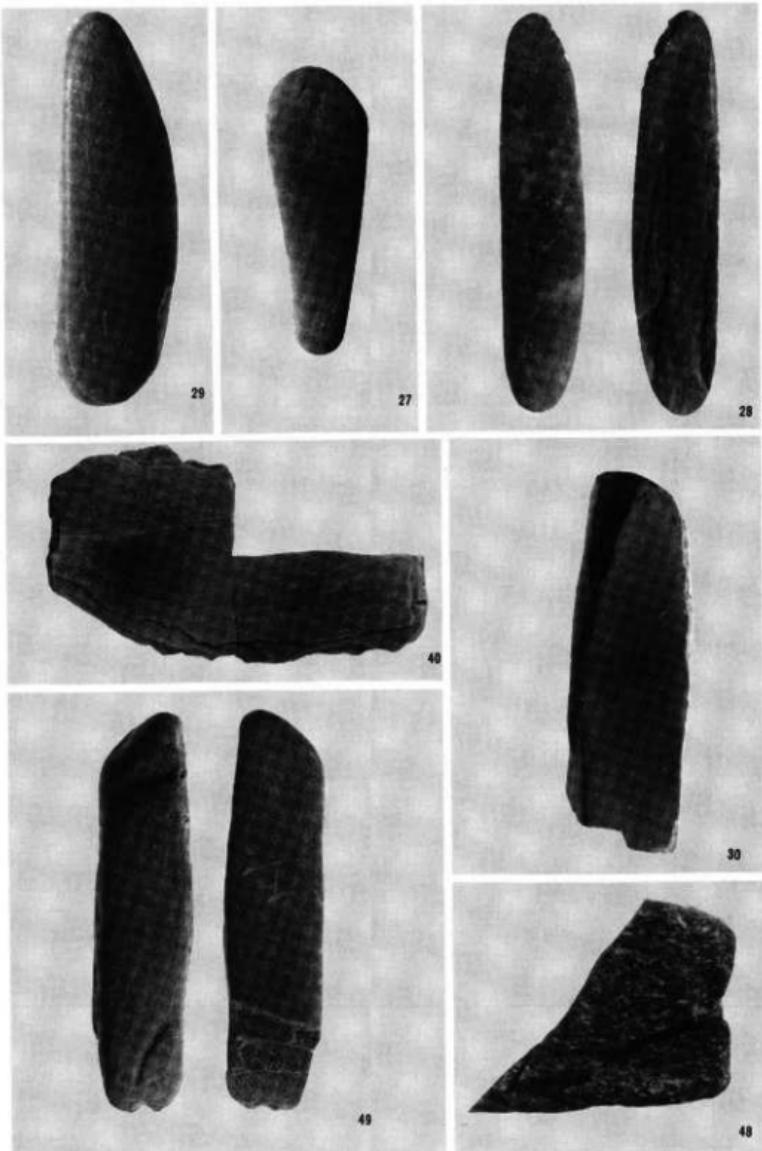
出土遺物 (10)

図版22



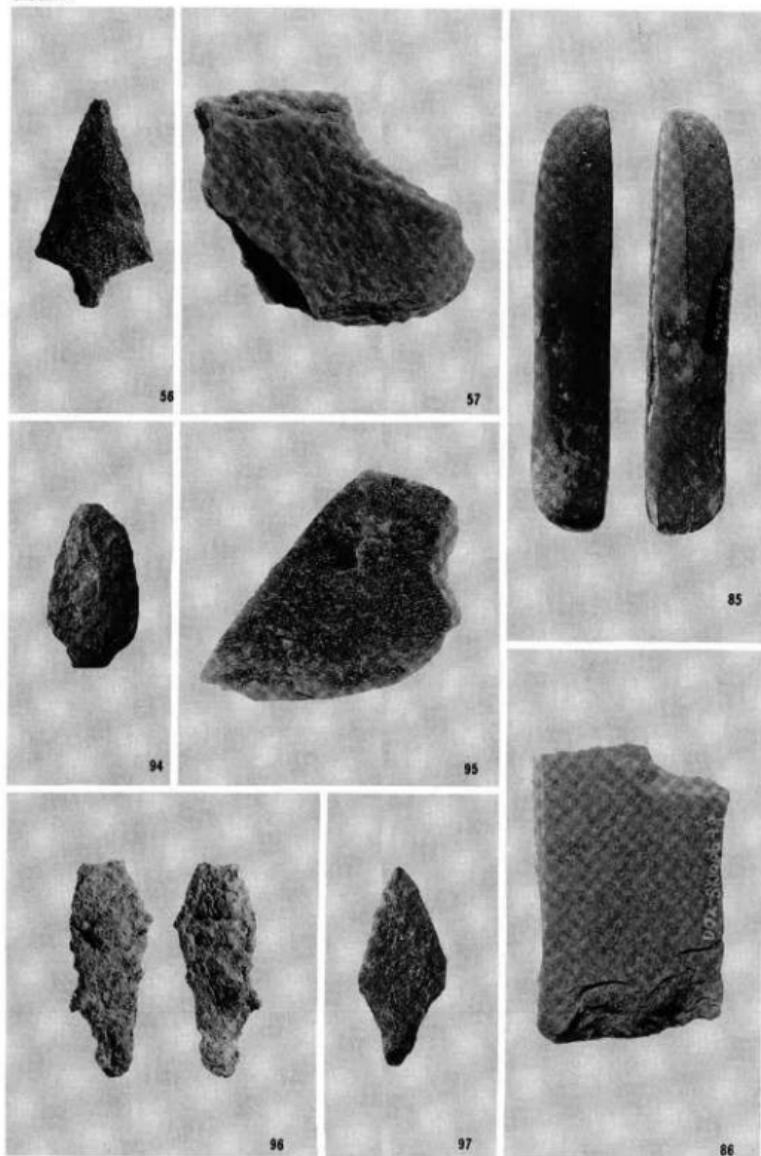
出土遺物 (11)

図版23

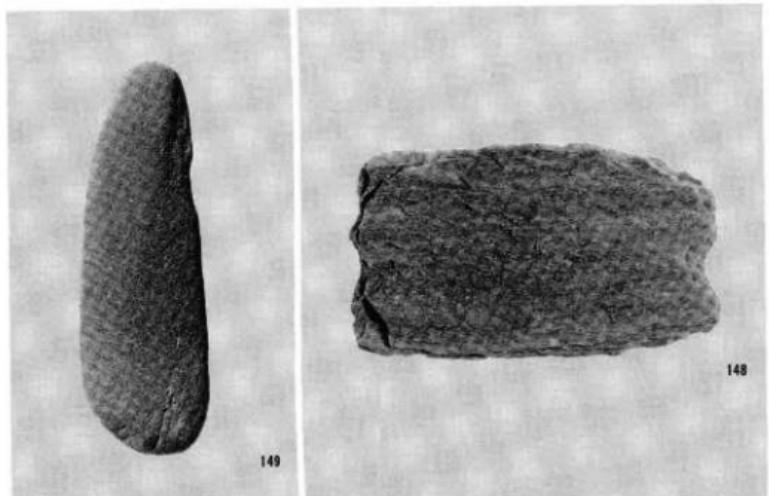


出土遺物 (12)

図版24

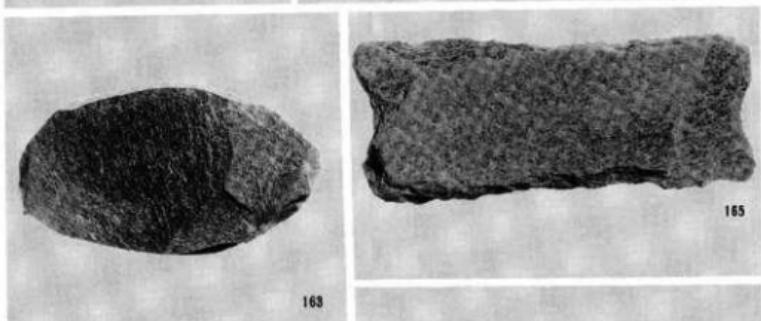


出土遺物 (13)



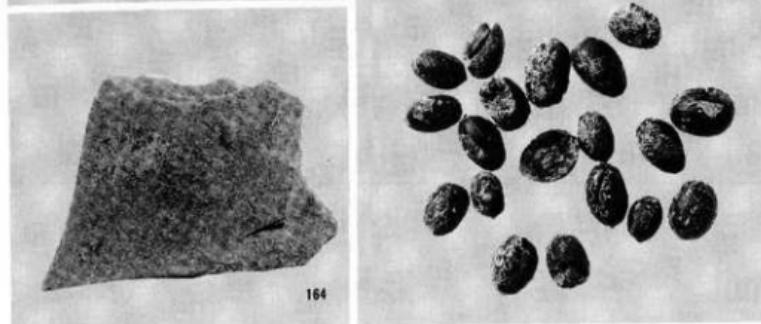
149

148



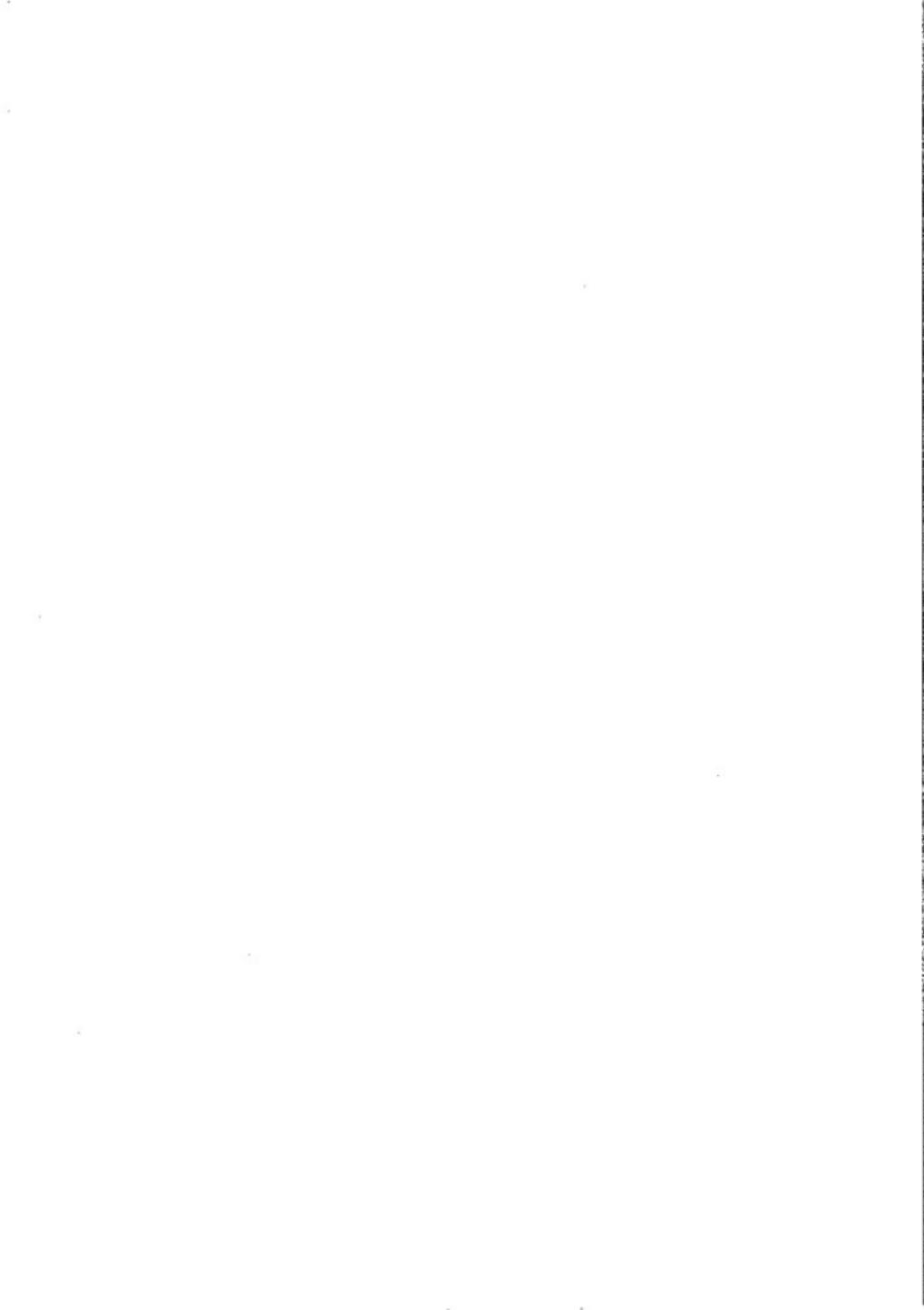
163

165



164

出土遺物 (14)



III 十 樂 寺 遺 跡

1 本京は四国縦貫自動車道建設に伴う十楽寺の遺跡発掘調査報告である。

2 発掘調査期間及び報告書作成の期間は次の通りである。

発掘調査期間 平成2年11月24日～12月8日

報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日

3 遺物番号、挿図番号及び図版番号は全て通し番号とした。

遺跡抄録

遺跡名	十楽寺遺跡
読み	じゅうらくじいせき
所在地	徳島県板野郡土成町字法教出159-2他 X=124.375～124.410 Y=81.065～81.100
種別	窯跡
時代	奈良・平安
主な遺構	窯跡・灰原
主な遺物	須恵器・土師器・鉄斧

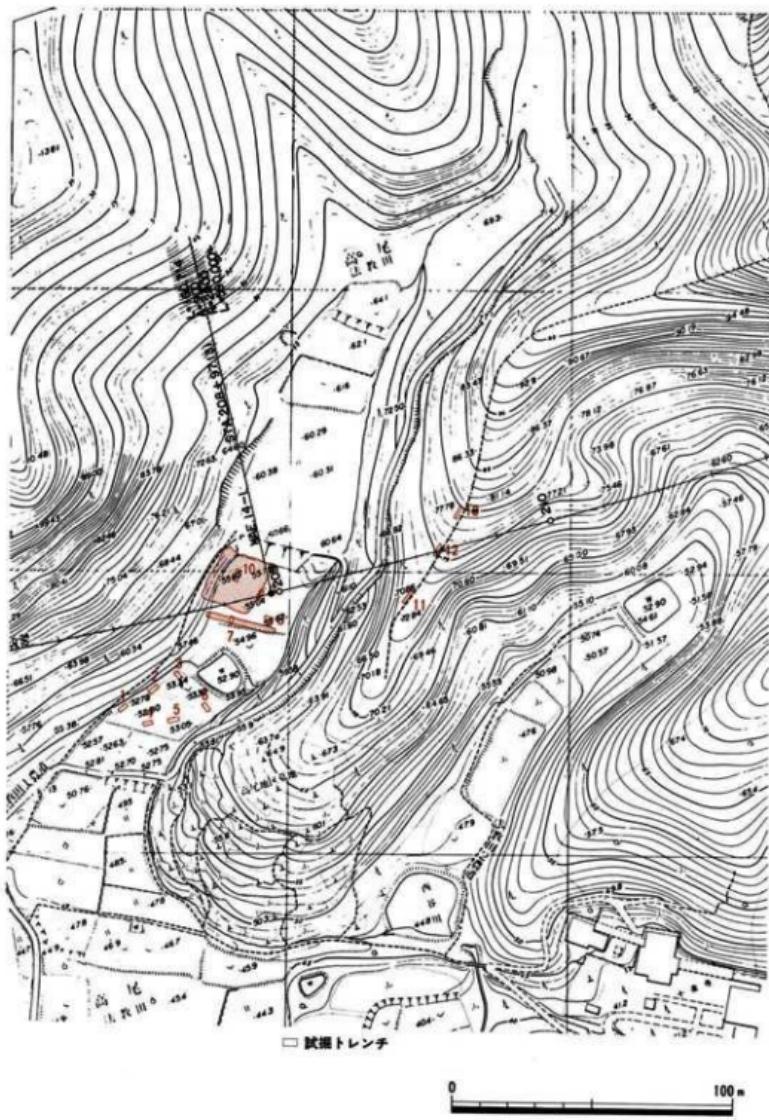
1 調査の経過

(1) 調査の経過

本遺跡が位置する阿讃山脈南麓の四国縦貫自動車道建設予定地は、調査に先立って実施された遺跡分布調査の際は山林と休耕田だったため遺物の採集などはなかったが、路線予定地に隣接する尾根の先端部が、十楽寺古墳群として知られていたことや、周辺の山麓部に須恵器の窯跡の存在が知られていたことから、調査の対象地としてあげられた。試掘は十楽寺古墳群の西側の谷一つ隔てた尾根の一部と、この尾根よりさらに西側の狭い谷を対象に実施することとした。谷は開墾されて小規模な溜め池と水田となっていたが、調査はこの谷と尾根に小規模のトレンチを合計13ヶ所設定して実施した。その結果、路線予定地内の中では谷の一番奥のNo.7とNo.10a 2ヶ所のトレンチから須恵器を中心とする遺物が出土した。このうち、山裾部分に設けたNo.10トレンチからは、遺物の他に木炭と灰からなる層の堆積が認められ、出土遺物の中に窯壁とみられるものが混じっていたことや、近くで窯跡や灰原が確認されていることなどから、窯跡の存在が予測された。また、水田の中央部に設定されたもう1ヶ所のNo.7トレンチでは、遺物が出土した層が開田の際に先の山裾付近から移動させたものであることが地権者の話で明かとなった。一方の、尾根部分の調査では、3カ所設けたトレンチとも表土を除去した段階ですぐ岩盤が露出し遺構の存在する可能性は皆無と判断される状態であった。このため、本調査は、この谷のNo.10の試掘トレンチ周辺を中心に行うこととし、これに二次堆積ではあるが遺物の出土した水田中央部の一部を遺物採集を目的として調査区として加えて実施することとした。

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたってのグリッド配置は発掘調査統一基準にしたがって第IV系国七座標を基準とし、5m×5mのメッシュを1グリッドとして調査区全体を覆い、南西の隅から北に向かってはABCのアルファベット、東に向かっては123のアラビア数字をそれぞれの記号としてふり、その組み合わせでそれぞれのグリッド名を表記することとした。なお、今回の調査では調査区が2ヶ所に分かれているため、北西の山裾側の調査区をA地区、水田中央部に設定されたほうをB地区と便宜上呼ぶこととする。



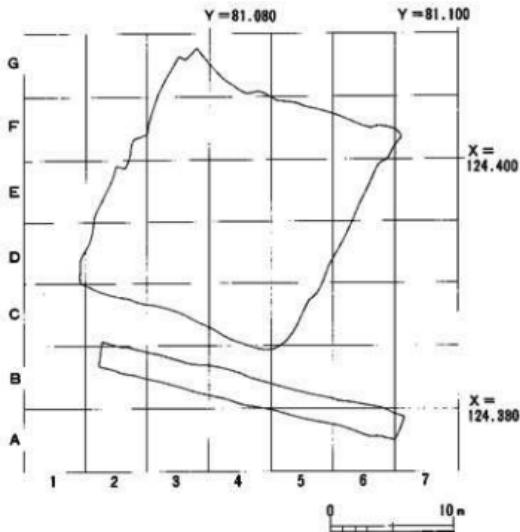
第1図 十業寺遺跡調査地位置図

(3) 調査日誌抄

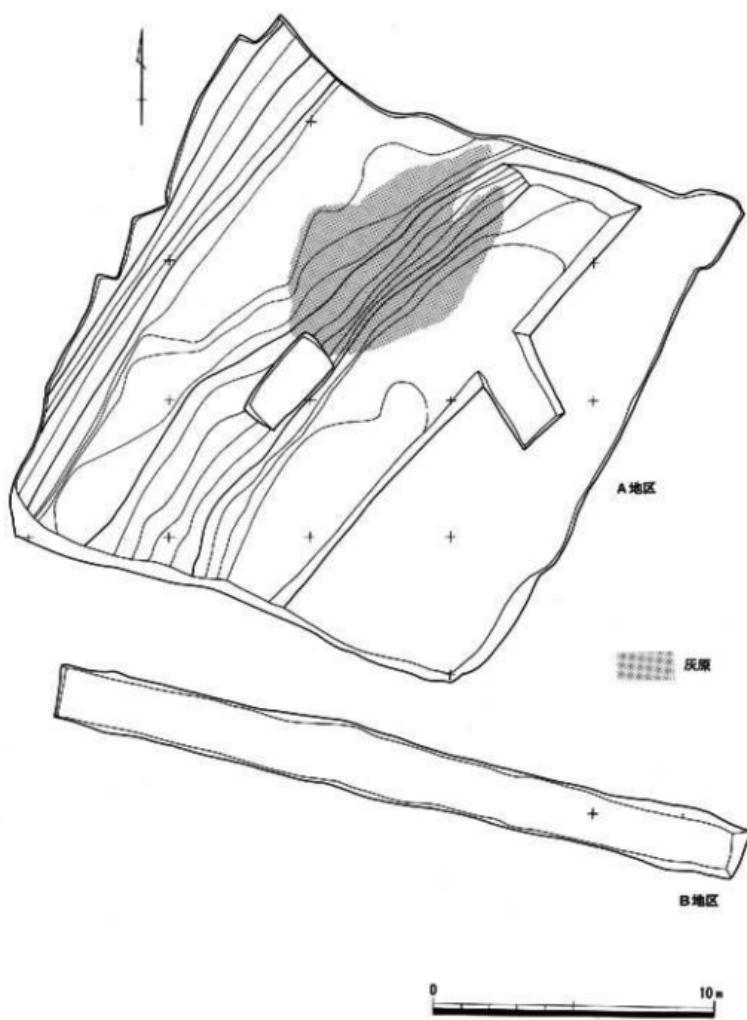
1990年

- 11月14日 調査区内の表土の機械掘削作業を行ふ。
- 11月17日 調査区内の人力掘削作業開始。
- 11月19日 A 地区の一部に灰原らしき部分を検出。
- 11月22日 灰原の範囲を一応おさえる。
- 11月26日 A 地区の灰原に隣接して自然流路の存在を確認。自然流路の掘り下げに着手。
- 11月29日 灰原の検出状況写真を撮影後精査開始。
- 12月3日 灰原精査と自然流路掘り下げの過程で流路内への灰原の広がりを確認。

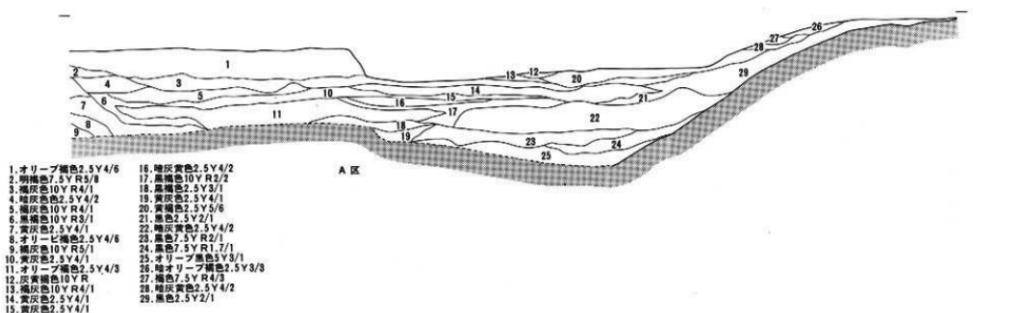
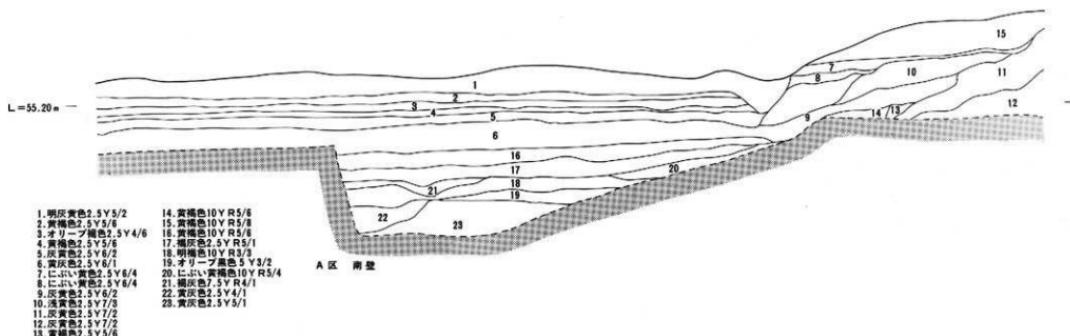
- 12月5日 流路内の灰原の検出状況の写真撮影。撮影終了後灰原精査開始。精査の過程で下部に新たな灰層を確認。
- 12月10日 灰原の精査、及び流路内のセクション図作製。
- 12月12日 セクションの写真撮影。
- 12月13日 人力掘削及び灰原精査を全て終了。
- 12月14日 調査区内の地形測量開始。
- 12月17日 地形測量を終了。
- 12月18日 調査区内のセクション図作製作業を全て終了。
- 12月19日 午前中全ての作業を終了、午後センターに帰還。



第2図 十楽寺遺跡グリッド配置図



第3図 十秦寺遺跡遺構配置図



第4図 十条寺道塙土層実測図



2 遺跡の立地と環境

周辺の地理的環境

吉野川北岸の中流域に位置する土成・上板の両町は、町の北側を徳島・香川の県境を東西に走る阿讃山脈から南に延びた比較的急峻な丘陵状の尾根が連続し、麓の平坦部の大部分もここから流れ出る中小の河川によって形成された扇状地によって占められている地域である。これら中小の河川の中でも土成町を流れる宮川内谷川は、吉田から柿原にかけて扇状地を形成したあとその流れを大きく東に転じ、上板町で同じく阿讃山脈から流れ出た泉谷川と合流して板野町にはいり、矢武・下庄付近を経て旧吉野川に流れ込むこの地域でも最も規模の大きい川である。この宮川内谷川と泉谷川に挟まれた引野地区は、阿讃山脈から南に向かって延びた尾根の末端部に小支谷が複雑に入り組んだ丘陵地帯となっている。本遺跡はこの引野の丘陵地帯の中でも一番南西の部分に位置し、西谷川にむかって開口する小支谷の比較的奥まった地点に位置している。



第5図 十楽寺遺跡・位置図

3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序

本遺跡が位置する西谷川に向かって開口する小支谷は、発掘調査以前は開墾によって平坦にならされ、小規模な水田と溜め池が谷筋に沿って点々と並んでいる状態であった。調査区は、試掘によって窯跡の残存する可能性があると判断された水田の一部と、西側に延びる尾根の東斜面の裾部を含め、A・Bの2地区を設定した。そのうち、南側のB地区については、水田の開墾の際に破壊された窯の土が客土された場所であることが判明したため、遺物の採取のみの調査となった。また、一部に山の斜面部をふくめ調査区を設定したA地区についても、斜面に堆積している表土を除去した時点で岩盤が露出し、窯本体は完全に破壊されていることが明らかになり、これに続く水田の平坦部でも山裾近くでは水田土壤を取り去ると同じ状況が認められた。ただ、調査区の大半は谷を流れていた旧河道にかかり、シルトと砂礫・粘土の互層が連続している状況が観察された。しかし、窯が操業していた当時は河の水量はかなり少なかったらしく、河道内に流れ込んだ灰原の上下を覆う層は何れも粘性のあるシルト質の上によって占められている。

(2) 検出された遺構と遺物

検出された遺構

今回の調査で窯の存在が予想された西側の山裾部は、開墾による削平が予想以上に激しく、窯本体は床面まで完全に失われその構造や位置を正確に明らかにすることはできなかった。ただ、河道内から出土した窯壁の破片には壁材として粘土に混入された植物の茎の痕跡とともに、側壁を作る際に補強材として組まれたと考えられる並行に並んだ木材の痕跡が残されているもの（図版8-7・8）があり、窯構築の際の状況を伺い知ることができる。また、かろうじて削平を免れた自然流路よりの斜面では、窯壁片と灰・木炭・焼土などが地山面に固着した状態で認められる箇所があり、前庭部または焚口があるいはこの近くに存在した可能性が考えられた。

灰原 前を流れる旧河道からは岸から河道内に流れ込んだ状態で上下2枚の灰原の広がりが検出された。この灰原は河道の岸に沿って、それぞれ上層が長さ10m・幅4m、下層が長さ8m・幅2.5mの規模で残っている。この2枚は、河道の中では間層を挟んでいるが、岸に近づくにつれてその厚みを減じ最後には重複している。山裾から自然流路内にかけての緩斜

面上という不安定な堆積状況のため、灰原自体は2次堆積の可能性が非常に強いと考えられる。

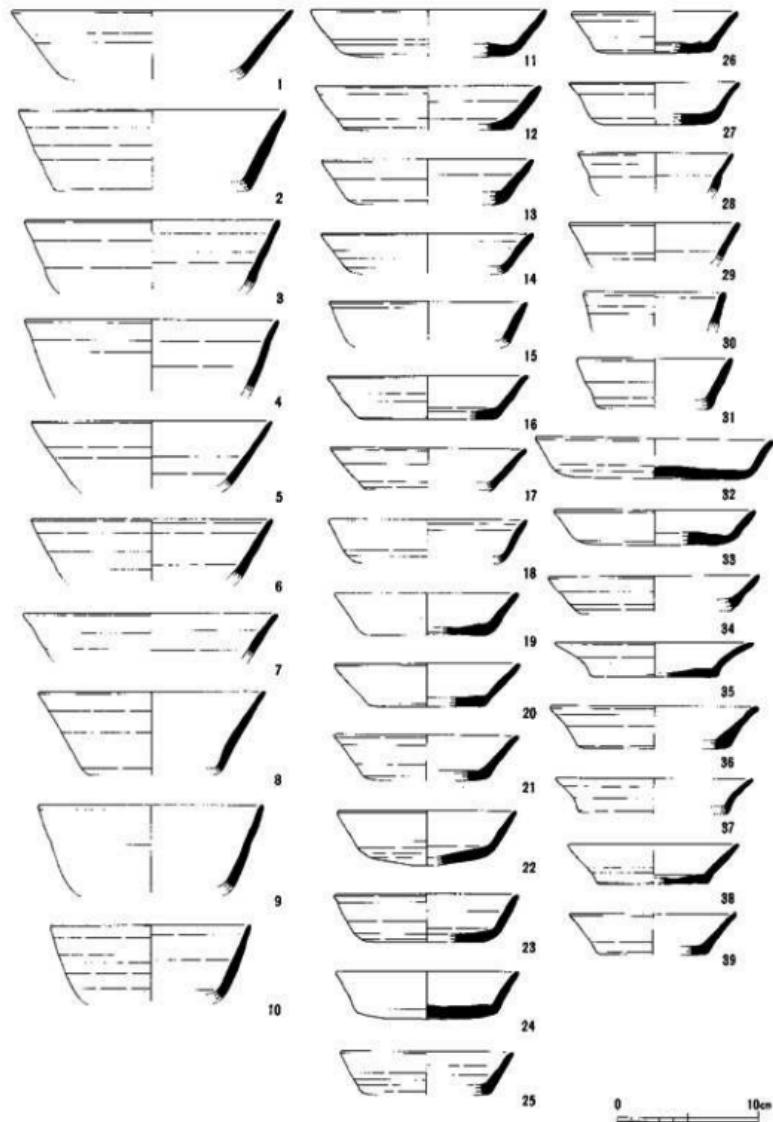
出土遺物

今回の調査では、遺物は主に河道の縁辺に残された2枚の灰原から出土しているが、他にも削平を免れた斜面の裾部や河道内の堆積物のなかに窓壁の破片などに混じって出土している。出土遺物はその大部分が須恵器によって占められているが、それ以外にも若干の土師器や黒色土器の他、削平を逃れた斜面裾部から鉄斧が1点出土している。出土した須恵器は小片のうえ変形したものが多く、形態と器種構成を正確にとらえることが難しいが杯・皿・碗・壺・蓋・鉢・高杯・半瓶・甌が認められる。器種ごとにその特徴を記すると以下のようになる。

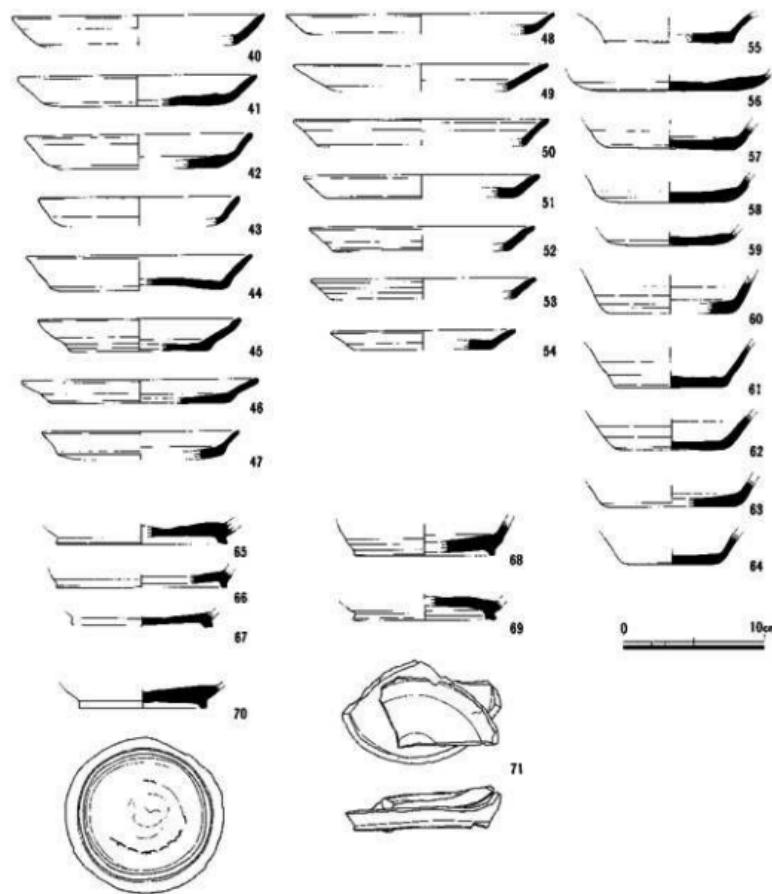
須恵器（第7～11図）

杯（1～39・65～71）

須恵器のなかで出土点数が最も多い器種である。形態から無高台のA類（1～39）と高台の付くB類（65～71）に大きく分けられるが点数はA類のほうが多い。A類は平らな底部から斜め外方に延びた口縁をもつ形態である。体部は直線的なもの、外反するもの、やや内湾するものがあるが、外反するものなかにはその度合いが著しいものがみうけられ、漸によって変形した可能性がある。底部と体部の境界が明瞭な稜線をもつものと不明瞭なもの認められ、大きさから口径14～20cm・器高5cm以上のもの（1～10）、口径13～17cm・器高3～4cmのもの（11～21）、口径10～13cm・器高3～4cmのもの（22～31・38・39）、口径14～17cm・器高2.5～3cmのもの（32～37）に分けられる。大型で器高の高いもののなかには碗A類に分類するほうが妥当な胴体も含まれている。また、32・33は平城京で杯Cとして分類されているものに該当する可能性があるものである。底部外面は回転ヘラ切り痕をそのまま残すもの（第10図142・143・図版6-1・2）が大半であるが、更にその後繊維状のものでナデ調整が施されるもの（図版6-3・4）や、ヘラ削りが行われるもの（図版6-5）も認められる。しかし、ナデ調整は不徹底なままのものが多く、また、ヘラ削りを施されたものは全体のなかでは極めて少ない。体部は内外面とも横ナデ調整が施されるが、底部との境が特に強く撫でられるものが認められる。底部内面もナデ調整が施されるが、なかには、底部外面の調整の際に用いられた当て具の痕跡が残るもの（第10図144・145）がある。B類はA類の杯に高台が付いた形態のものと考えられるが全体の器形を伺える資料はなく、中にB類も含んでいると思われるが出土点数も少なく分離できなかった。高台の脚端面は水平のものと外傾するものの2種類がある。底部外面はヘラ切りのままのもの（図版6-7）



第6図 十楽寺遺跡出土土器実測図（1）



第7図 十楽遺跡出土土器実測図（2）

と粗いナデ調整が施されたものがある。また、底部外面に爪形状圧痕が高台内を一周するものの（70・図版6-8）も1点出土している。

皿 (40~54)

杯同様、無高台のA類と高台付きのB類が存在する可能性があるが、破片のためにB類は杯B類と区別できない。皿A類は偏平な底部に斜め上方にひらく短い口縁部が付く形態のも

ので、体部が直線的に伸びるもののが大部分を占めているが、中にはやや外反するものも認められる。口径は13~14cmのやや小型のもの（43・45・47・54）と16cm以上のものに分かれるが器高は両方とも1.5~2.5cmで口径の大きさによる差は認められない。底部は杯同様回転ヘラ切りの後にナデ調整が施されている。

杯蓋（72~96）

杯蓋は、偏平な天井に屈曲する縁部がつく形態のもの（72~93）と、天井が丸く笠形で縁部が屈曲しない形態のもの（94~96）に分けられるが出土点数は圧倒的に前者が多い。つまりの残るものは少ないが、擬宝珠形のもの（75~78）が認められる。調整は天井部外面はヘラ切り後にナデ調整またはヘラ削りが加えられるがナデ調整のほうが多い。中には、内面に杯同様調整の際に用いられた当て貝の痕跡の残る個体（146・図版7-1）もある。

蓋（97~109）

いずれも偏平またはそれに近い天井部に、やや丸みをもって折れ曲がる縁部がつくもので、縁部は外反ぎみのものと、ほぼ垂直なもの、内湾するものがあり、口唇端部も平坦なものと外側に向かって斜めにそぎ落とす形態のものがある。天井部はヘラ削り、口縁部はナデ調整によって整えられることが多い。口径の大きさから、だいたい10~12cmの小型のものと、14cm前後の中型のもの、16cmの大型のものの3種類に分けられる。

椀（110）

内湾する口縁に内傾する口縁端部がつく鉄輪形の形態をとるものと考えられるものが、わずか1点出土しただけである。平城京で杯Eに分類されている。

平瓶（111）

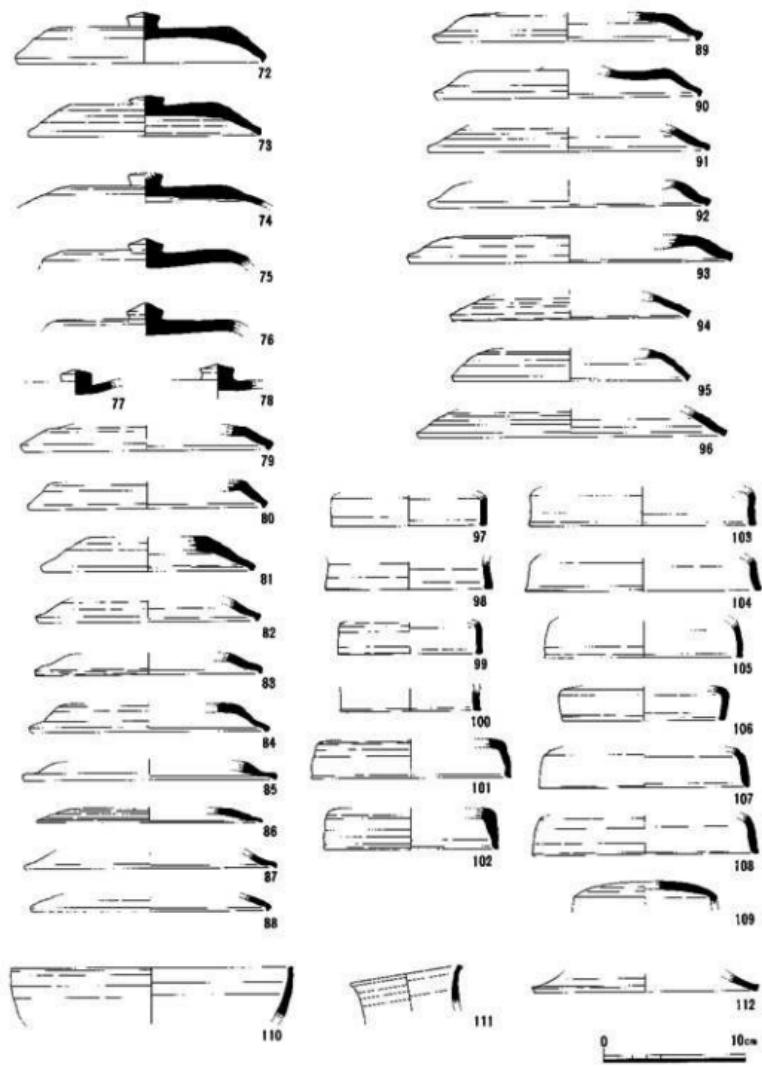
口縁端部を丸くおさめた広口の口縁部の小片と、把手の一部と考えられる破片がそれぞれ1点ずつ出土しているのみである。

高杯（112）

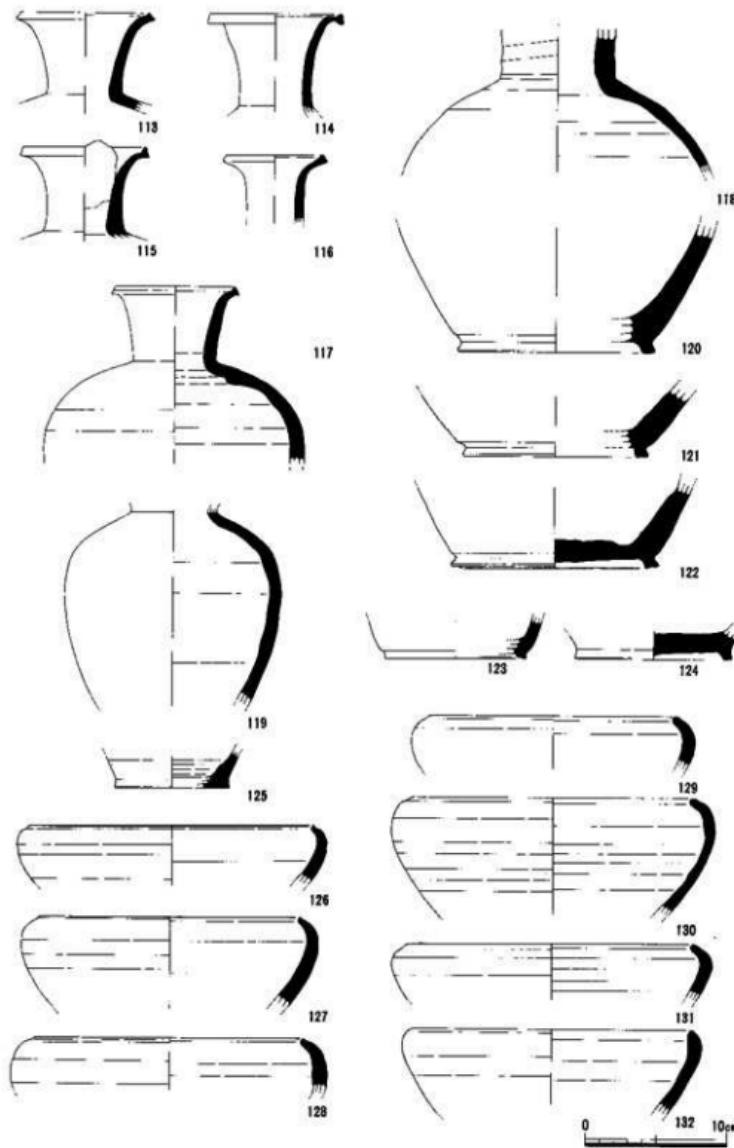
杯部の一部と考えられる破片と脚端部の破片が出土しているが、杯部は脚柱との境付近の破片のため、口縁部の形態などは不明である。2点出土している杯部のうち1点は外面がヘラ削り、内面がナデ調整によって整えられ、内面の一部に布によるとみられる圧痕（図版8-6）が認められる。

壺（113~125）

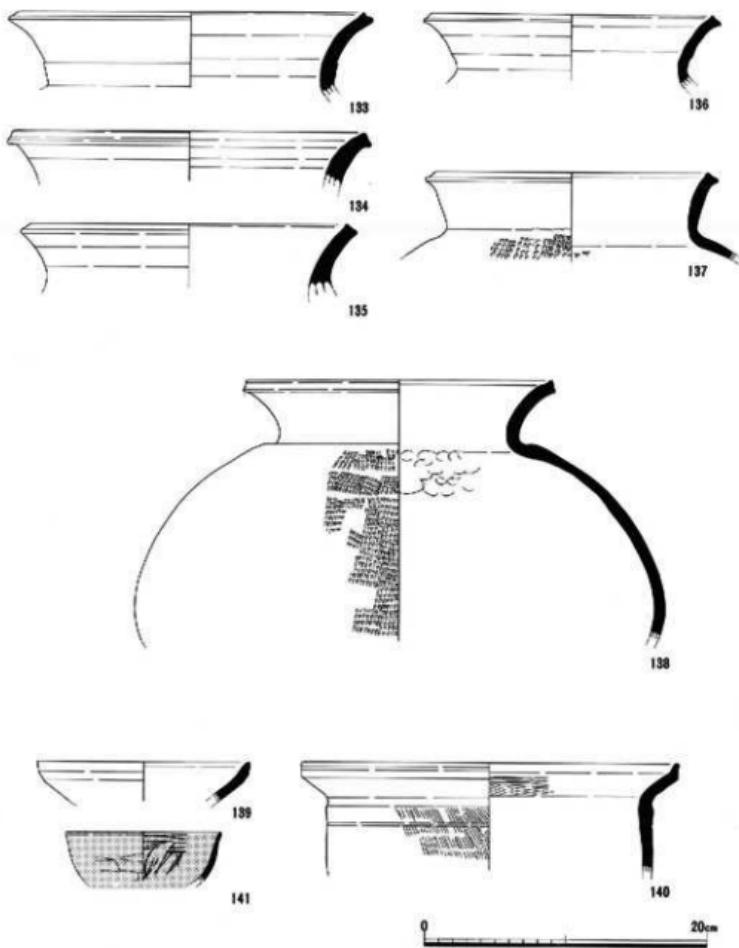
高台のついた舟形の体部と、頸部から緩やかに外反しながらびる口縁端部を尖り気味に上方に摘み上げる形態の口頸部を有する、平城京で壺Lに分類されるものが大半を占めているが、1点だけ底部に回転糸切り技法の跡を残す壺Gと考えられる破片（125・図版7-8）も出土している。口頸部と体部は別々に作られた後に接合されたらしく、頸部と体部の境界には接合痕を明瞭にとどめるもの（117・図版7-5）がある。体部外面には回転ナデ調整



第8図 十楽遺跡出土土器実測図（3）



第9図 十秦寺遺跡出土土器実測図(4)



第10図 十楽寺遺跡出土土器実測図（5）

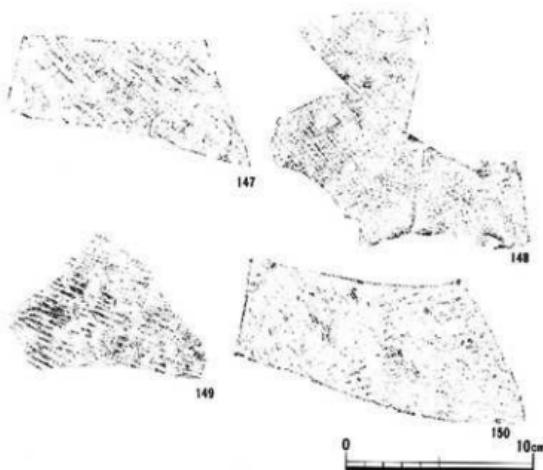
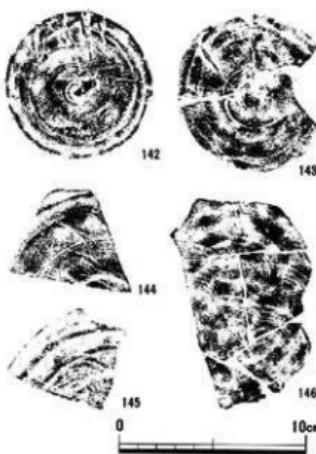
が入念に施されているがなかには体部下間に回転ヘラ削りが加えられるものもある。ハの字形の高台の付いた底部には回転ヘラ切り痕をとどめ（図版7-6）、高台の周縁は接合をよくするためか丁寧に撫でられている。また、底部内面は一般的に調整が粗雑で指頭による粗いナデや圧痕（図版7-7）がそのまま残されている。

鉢（126～132）

底部からいったん斜め外上方に大きく開いた後、肩部から口縁にかけて内湾する形態の体部をもつ、いわゆる鉄鉢形の土器と呼ばれるもので、平城京で鉢A類に分類されるものに類似する。口縁の形態から、端部が外反して上方に短く立ち上るもの（126～128）とそのまま丸く収められるもの（129～132）の2種類に分類される。底部は丸底と考えられるものが1点出土している以外、明確に平底や尖底と判断できる資料は出土していない。調整は何れも器外面全体に回転ナデ調整が施されているが、それに先立ちヘラ削りが加えられているものもある。

壺（133～138）

杯とともに出土点数が多いが、胴部の破片が 第11図 杯及び杯蓋内外面の成形・整形痕



第12図 壺胴部外面の叩き目文

大半で図示できたものはごく僅かである。頸部から直線的あるいは緩やかに外反しながら上方にのびる口縁端部は上方または下方につまみ出している。口縁から頸部にかけては回転ナデ調整が施されるが、ヘラ削りの後にナデ調整が行われたもの（133・134・図版8-3）も認められ、頸部に段が付くもの（133・136）もある。また、頸部と体部の境を強くナデるもの（138）がある。体部の調整は、外面は格子目または平行叩きが施された後にナデ調整が加えられるが、叩きの種類は格子目のものが圧倒的に多く（第11図147・148、図版8-1）。平行叩きはごく僅かである（第11図149、図版8-2）が、なかには両方を併用しているもの（第11図150）もある。内面にも同心円文叩きが施されるが後に丁寧にナデ消され、叩き目の判読できるもの（図版8-4）は少ない。

土師器（第11図）

杯（139）

河道中の堆積の中から1点出土している。直線的に伸びる口縁端部はやや肥厚し丸く收められ、横なでが施されている。

壺（140）

杯と同じく河道中から数点出土したが口縁部の破片は1点だけである。口縁部は、屈曲の少ない半球に近い胴部からいったん斜め外上方に直線的にのびた後、上方に屈曲する。口頸部は横ナデ、胴部は粗いハケ目調整が加えられている。

黒色土器（第11図）

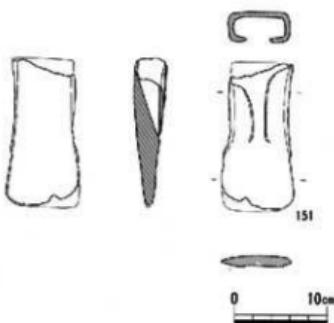
椀（141）

内湾気味に立ち上がる口縁部の破片が1点だけ出土している。内外面ともヘラ磨きが施されている。

鉄製品（第12図）

鉄斧（151）

山裾部で検出された前庭部または焚口部分と推定された灰原部分から袋柄式のものが1点出土している。灰原中からの出土状況から考えてこの窯跡と同じ年代のものであると考えられる。



第13図 十秦寺遺跡出土鉄器実測図

(3) 考察

出土遺物について

本遺跡の出土遺物は、山裾の緩斜面から自然流路内にかけて堆積した灰原と、その周辺から出土した須恵器・土師器・鉄器からなるが、何れも斜面部と流路内という堆積が不安定な場所からの出土で、時期的にも幅広い時期のものを含んでいる可能性が考えられる。このような状況のもとで出土した遺物のなかでも出土点数の最も多い須恵器は、杯A・B・皿Aをはじめとして蓋A・B・壺L・G・壺A・高杯・鉢A・碗A・平瓶・壺蓋などの器種から構成されている。このような須恵器の器種構成と形態上の特徴は、概ね8世紀から9世紀前半にかけての時期に属するものと考えられ、本遺跡の年代の一端もこの範囲で捉えることができると考えられる。さらにこれを細かく見ると、破片ながら出土点数の最も多い杯の口径が20cmまでで、20cmを越える大型のものが見られないことや、同時期の土師器の形態を模倣した杯Cと考えられるものがほとんど存在しないこと、鉢Aの形態が丸底に近いものであると考えられること、壺は高台のついたLによって占められているが、壺Gが1点ではあるが出土していることが上げられる。このうち杯、皿と壺の特徴を平城京で示された編年においてはめてさらに細かな年代を推測してみると、杯や皿に土師器の模倣形態のものが減少しはじめるのが平城京ではIV段階からで、杯Cが消滅するのはV段階といわれている。また、壺Jは少なくとも平城京II段階くらいに出現し9世紀以降まで続く形態であるが、壺GはVの段階から出現しVI以降急増するとされている。このことから総合的に判断すると、本遺跡の須恵器の年代の上限は少なくとも平城京のIVないしはVの段階に位置づけることができるのではないかと考えられる。ただ、鉢Aについては平底或いは丸底風の平底から尖底への移行の時期がIII以降とされることから若干遡る可能性もあるが、平城京VI段階でも丸底は残ることからIVないしはV段階でも矛盾することはないと考えられる。また下限については、須恵器の組成からみると確実に8世紀末までの年代が与えられる組み合わせが認められ、それ以後も存続する器種があることを考慮すると、9世紀代前半頃までの年代を考えたほうがよいと思われる。

4 まとめ

今回の十楽寺遺跡の調査では、窯本体そのものは既に破壊され、詳しい構造などは一切明かにすることはできなかったが、その立地条件からは山裾の緩斜面を利用した窯窓であったことは間違いないと考えられる。吉野川北岸の土成・上板町周辺で須恵器の窯跡に関する調査が行われた遺跡に土成町前田遺跡と市場町香美遺跡が挙げられるが、本遺跡同様、灰原やその周辺部の調査が実施されただけで窯本体の構造は不明である。年代的には前田遺跡が9世紀末から10世紀初め、香美遺跡が平安時代中期（9世紀）と平安時代末（11世紀末～12世紀）とされており、いずれも本遺跡より後出する時期のものである。しかし、出土した須恵器の器種構成をみると、前田遺跡や香美遺跡の平安中期段階のものは杯・杯蓋・甕を中心に水瓶・壺・鉢・などが含まれる点は本遺跡と共通する部分が多く、奈良時代から平安時代中期までの須恵器生産の器種構成に大きな変動がなかったことが伺うことができる。しかし、各遺跡の年代幅や遺跡ごとの隔たりも大きく今後は窯本体の構造やより細かい年代をおさえることが可能な遺跡の調査が実施されることが期待される。

参考文献

- | | |
|-------------|---|
| 平安学園考古学クラブ | 『陶邑古窯跡群』I 1966年 |
| 大阪府教育委員会 | 『陶邑』I～III 1976年 |
| 奈良国立文化財研究所 | 『平城宮発掘調査報告』VII 1976年 |
| 奈良国立文化財研究所 | 『平城宮発掘調査報告』X I 1982年 |
| 徳島県教育委員会 | 『香美窯址現地説明会資料』より 1987年 |
| 徳島県教育委員会文化課 | 『土成前田遺跡』 1987 |
| 福家清司編 | 『土成前田遺跡－県道船戸切横上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県教育委員会 1989年 |
| 古代の土器研究会編 | 『古代の土器 I 都城の土器集成』 1992年 |
| 古代の土器研究会 | 『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－』 1992年 |

第1表 十乘寺遺跡出土遺物観察表

番	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	形態の特徴	測定	備考
1	杯 (山腹底)	19.0	4.9	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部はやや尖り気味におきめる。	回転ナゲ調整。	
2	杯	18.9	5.8	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
3	杯	18.0	5.9	体部は外上方に直線的にのびる。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。 体部外側は底部附近が回転へラ削り。	
4	杯 (口縁底)	17.9	6.1	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部近くでやや外反する。底部はやや尖り気味におきめる。	回転ナゲ調整。	
5	杯 (口縁底)	17.0	4.7	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部はやや尖り気味におきめる。	回転ナゲ調整。	
6	杯	17.0	4.3	体部は外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
7	杯 (口縁底)	18.0		体部はなめ外上方に大きく開く。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
8	杯	16.0	5.9	体部はほぼまっすぐ上方にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。 底部は回転へラ削りの後にナゲ。	
9	杯	15.9	6.2	体部はほぼまっすぐ上方にのびる。	回転ナゲ調整。	
10	杯	14.2	5.3	体部はやや内窪ぎみに外上方にのびる。口縁部は尖り気味。	回転ナゲ調整。	
11	杯	16.7	3.3	体部はなめ外上方にやや内窪しながらのびる。口縁部は尖り気味におさめる。 体部と底部の境は不明瞭。	回転ナゲ調整。底部と体部の境は浅い。 ナゲが残される。底部は回転へラ削りの後にナゲ調整。	
12	杯	16.0	3.1	体部はやや内窪ぎみになめ外上方にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。 底部は回転へラ削り。	
13	杯	15.0	3.2	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
14	杯	15.0	2.8	体部は外上方に直線的にのびる。 口縁部は丸くおさめる。	回転へラ削りの後回転ナゲ調整。	
15	杯	14.1	3.2	体部は外窓窓後に外上方にのびる。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
16	杯	14.7	3.1	体部は直線的に外上方にのびる。口縁部は尖り気味。	回転ナゲ調整。 底部は回転へラ削り。	
17	杯 (口縁底)	13.9	3.0	体部は外上方に直線的に開く。口縁部はやや尖り気味におさめる。	回転ナゲ調整。体部外側は底部との境が強くナゲられる。	
18	杯	14.1	3.1	体部は内窓窓後に外上方にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。 底部付近は回転へラ削り。	
19	杯	13.0	3.0	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。 底部は回転へラ削りの後にナゲ調整。	
20	杯	13.2	3.0	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部はやや尖り気味におさめる。	回転ナゲ調整底部と体部の境は僅いナゲが残される。底部は回転へラ削りの後にナゲ調整。	
21	杯	13.0	3.2	体部はやや外反しながら外上方にのびる。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。体部外側は底部との境が強くナゲられる。	
22	杯	12.8	4.0	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
23	杯	13.0	3.5	体部から丸く内窓にして口縁部につづく。 口縁部は外反しながら上方に遙かく立ち上がる。	回転ナゲ調整。 体部外側は回転へラ削りの後ナゲ調整。	
24	杯	13.0	3.4	体部は外反しながらなめ外上方にのびる。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
25	杯	12.8	3.1	体部は直線的に外上方にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	
26	杯	11.8	3.0	体部はなめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。体部外側は底部との境が強くナゲられる。	

No.	番号	「高」 (mm)	「深」 (mm)	形態の特徴	技法	備考
27	杯	12.0	3.0	体部は外反しながらなめ外上方にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
28	杯	11.0		体部は内弯気味に外上方へのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外面は下半部が強くナデられる。	
29	杯 (口跡)	12.0	2.7	体部は外上方へ直線的にのびる。 縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
30	杯	10.1	2.4	体部は外上方に直線的にのびる。 縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
31	杯	11.0	3.5	体部は外上方に直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外側下半部は強くナデされる。	
32	杯	16.0	2.0	体部はやや外反しながらなめ外上方にのびる。 口縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
33	杯	14.2	2.5	体部はなめ外上方に直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
34	杯	16.0	2.5	体部は直線的に外上方にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 ナデは強く速く。	
35	杯	14.0	2.5	体部は強く外反しながら、なめ外上方に大きく開く。 II縫隔部は丸くおさめる。 底部の縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外延は底部との境が強くナデされる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	成時に変形?
36	杯	14.7	3.0	体部は外反しながらなめ外上方にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
37	杯	14.0	2.5	体部は大きく外反して上方にのびる。 II縫隔部は丸く氣味。	回転ナデ調整。 体部外側下半部は強くナデされる。	成時に変形?
38	杯	12.0	2.8	体部はなめ外上方に直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外延は底部との境が強くナデされる。底部は回転ヘラ切り。	
39	杯	11.8	3.0	体部はやや外反しながら外上方にのびる。 縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
40	皿	17.0	2.1	体部はなめ外上方に直線的に大きく開く。 開く。II縫隔部は丸く氣味。	回転ナデ調整。 底部はハケによるナデ調整。	
41	皿	16.0	2.2	体部はなめ上方に直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
42	皿	16.1	2.4	体部は内弯気味に外上方にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外延は底部との境が強くナデされる。底部は回転ヘラ切り。	
43	皿	14.2	2.0	体部は内弯して外上方にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
44	皿	16.1	2.5	体部はなと外へ直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
45	皿	14.5	2.2	体部はたん外反したのち右内弯気味に外上方にのびる。II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外延は底部との境が強くナデされる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
46	皿	16.0	1.7	体部は外反気味に大きく開く。II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後、ナデ?調整。	
47	皿	14.0	2.0	体部はまっすぐ外方にのびる。II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
48	皿	19.0	1.4	体部は外上方に直線的に丸かくのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
49	皿	18.1	1.0	体部はなめ外上方に大きく開く。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
50	皿	18.1	2.0	体部ははったん内弯気味に立ち上がりた後、外上方に直線的にのびる。II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
51	皿	16.0	1.7	体部はなめ上方に直線的にのびる。 II縫隔部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	形態的特徴	技法	備考
52	皿	18.0	1.7	体部は外上方に直線的に大きく聞く。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底面はナヂ。	
53	皿	16.0	1.4	体部はかるく外反しながら外上方にのびる。 口縁部はやや尖り角棘。		
54	皿	13.1	1.4	体部は直線的に外上方に大きく聞く。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
55	杯 (底部)	底径9.1		体部は大きく外反したのち、ななめ外上方で大きくのが、底部と体部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切り。	
56	杯 (底部)	底径10		底部と体部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。	
57	杯 (底部)	底径9.0		体部はななめ外上方にたち上がる。 体部と底部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。	
58	杯 (底部)	底径8.2		体部はゆるやかにのびて外上方にのびる。 体部と底部の境は不明瞭。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。内面込み部はナヂが施こされる。	
59	杯 (底部)	底径6.2		体部はななめ外上方に直線的に大きく聞く。	底部は回転ヘラ切りの後、板ナヂとナヂが施こされる。	
60	杯 (底部)	底径8.8		体部はななめ外上方に大きく聞く。	回転ナデ調整。	
61	杯 (底部)	底径7.7		体部はななめ外上方に直線的にのびる。	回転ナデ調整。体部外側は底部との境が強くナヂられる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
62	杯 (底部)	底径7.4		体部はやや内窪しながらななめ外上方にのびる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
63	杯 (底部)	底径9.1		体部と底部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ削りの後ナヂ。	
64	杯 (底部)	底径6.2		体部はななめ外上方に直線的にのびる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ヘラ削り。	
65	杯 (底部)	底径12.1		底部は平らでハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ削りの後、ヘラケズリとナヂが施こされる。	
66	杯 (底部)	底径12.1		平らな底部にハの字形高台が付く。	底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整。	
67	杯 (底部)	底径10.0		平らな底部にハの字形高台を付ける。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。 高台取り付けに際して回転ナデ調整が施こわれる。	
68	杯 (底部)	底径10.0		平坦な底部に低いハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ削りによって整えられる。高台の取り付けに際して回転ナデ調整が用いられる。	
69	杯 (底部)	底径9.0		平坦な底部に直立する高台をつける。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後、ナヂ高台取り付けに際してナデ調整。	
70	杯 (底部)	底径9.5		体部はななめ外上方に内窪気泡にのびる。 底部にはハの字形高台がつく。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
71	蓋	17.7	3.6	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込み縫隙は尖る。中央部がやや高い扇平なまみを付ける。	回転ナデ調整。口縁部外側は強くナヂられる。天井外面は回転ヘラ削りの後、ナデ調整。	
72	蓋	17.7	3.6	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込み縫隙は尖る。中央部がやや高い扇平なまみを付ける。	回転ナデ調整。口縁部外側は強くナヂられる。天井外面は回転ヘラ削りの後、ナデ調整。	
73	蓋	16.5	3	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込む。中央部がやや高い扇平なまみを付ける。		
74	蓋		2.1	天井部は平らで扇平なまみを付く。	天井部は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 内面には調整の際のアテ具の痕跡がある。	

No.	器種	口徑 (cm)	高さ (cm)	形態の特徴	性状	備考
75	蓋			天井部は平らで腹底底部のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
76	蓋			2. 平坦な天井部に圓錐形のつまみが付けられる。	天井部外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 内面には巻心の溝のあて其の筋路が認められる。	
77	蓋		1.7	天井部はやや凹み、中央がやや高い盛平たつまみを付ける。	ナデ調整。	
78	蓋		2.5	平坦な天井部に中央がやや高い盛平たつまみを付ける。	天井部外面は回転ヘラ削りの後、ナデ調整か?。	
79	蓋	17.9	1.8	天井部からゆるやかに外下方にのびる。口縁端部は内下方におり込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 口縁から天井まで回転ヘラ彫り。	
80	蓋	17.0	1.9	平坦と考えられる天井部からゆるやかに外下方にのびる。口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
81	蓋	15.2	2.5	平坦な天井部からゆるやかに外下方にのびて口縫との間によわい筋を生じる。口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
82	蓋	16.0	1.5	口縁端部は下方に折り込み尖り気味にあります。	回転ナデ調整。	
83	蓋	16.1	1.5	天井部からならだらかに外下方にのび口縫近くで段をもつ。口縁端部は下方におり込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
84	蓋	17.0	2.0	口縁端部は天井部との間で削りして段を生じる。口縁端部は内下方におり込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
85	蓋	18.0	1.4	低い天井部からならだらかに外下方にのび口縫近くで段をもつ。口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
86	蓋	16.0	1.0	低い平らな天井部からならだらかに外下方にのびる。口縁端部は折り込まれず丸くおさめる。	回転ナデ調整。 外側は回転ヘラ削りを行なう。	
87	蓋	17.9	1.1	などかに下方にのび面い段を生じる。口縫の端部はかるく下方に折り込まれ丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
88	蓋	17.0	1.0	やや丸みを持ったならだらかに口縁部に持つて外下方へのび口縫近くで段をもつ。口縁端部は下方におり込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
89	蓋	19.1	2.0	平坦な天井部からならだらかな丸みを持つて外下方へのび口縫近くで削り段を生じる。口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
90	蓋	18.9	2.0	天井から口縁部に向ってゆるやかに下る。口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削りが施こされる。	
91	蓋	20.6	1.8	口縁端部は下方に短く折り込み丸くおさめる。 段を持つ。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
92	蓋	20.0	1.9	天井部からならだらかな丸みを持って外下方へのび口縫近くで削り段を生じる。口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
93	蓋	23.0	1.9	天井部からゆるやかに外下方にのびる。口縁端部は下方に短くつまみ出す。	天井部外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
94	蓋	16.9	2.0	天井部からならだらかな丸みを持って下方へのびる。口縁端部は下方へわずかにつまみ出す。	回転ナデ調整。 外側は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	

No.	番種	口幅 (cm)	唇高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
95	兼	16.9	2.3	天井部からならだらかな丸みをもって外 下方にのびる。 口縫端部は下方にわずかにつまみ出す。	回転ナデ調整。 外端は回転ヘラ削りの後、ナデ。	
96	兼	21.9	2.0	天井部から丸みを持ちながら口縫 部までのびる。口縫端部は平ら。	外端は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
97	兼	16.9	2.1	I縫は低ぼまっすぐ垂下しII縫端部は 平ら。	回転ナデ調整。	
98	兼	11.8	1.9	I縫端部はややなめ外下方に垂下しII 縫端部は平折につくる。	回転ナデ調整。	
99	五	10.2	2.2	半張と考えられる天井部から口縫がほ ぼまっすぐに垂下する。II縫端部は、 やや内側にして平ら。	回転ナデ調整。	
100	兼	10.0	1.6	垂下するI縫端部はわずかであるが外 反し平。	回転ナデ調整。	
101	五	14.1	2.7	水半に近いと恐われる天井部から口縫 がやや内側しながら垂下する。II縫端 部は尖る。	天井部は回転ヘラ削り。 II縫端部は回転ナデ調整。	
102	兼	12.4	2.9	ほほ水半ともむわる天井部からI縫 がなめ外下方に直線的に垂下する。口 縫端部は尖る。	天井部は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 口縫端部は回転ナデ調整。	
103	兼	16.0	2.3	I縫は、天井部からや外反ぎみに垂 下する。 口縫端部は平らに仕上げられる。	回転ナデ調整。	
104	兼	16.7	2.4	天井部から外反ぎみに垂下する口縫を もつ。 II縫端部は平らでやや外側に延展する。	回転ナデ調整。	
105	兼	14.1	2.6	口縫部は内寄気味に垂下し端部は平坦 になる。	外端は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調 整。	
106	兼	11.8	2.5	口縫部は平折に近い天井から内寄気味 に垂下する。口縫端部は平ら。	天井部外面は回転ヘラ削り。 口縫端部は回転ナデ調整。	
107	兼	14.8	2.3	I縫端部はやや内寄気味に垂下し端部は 尖る。		
108	兼	16.0	2.8	口縫部はややなめ外下方に垂下する。 II縫端部は平ら。	口縫部外面の一部まで回転ヘラ削り。 II縫端部は平ら。	
109	五 (天井部)	10.0	18.7	天井部はやや丸みを持つ。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削り。	
110	機	20.0	4.0	体部はやや内寄気味に上方にのびる。 口縫部は外折にやや放張気味で半埋 さみに仕上げる。	回転ナデ調整。	
111	平張 (口縫)	7.9	2.7	口縫から口縫にむかってやや外反ししな がらのびる。 口縫端部は外向きにつまみ出しあくお さめる。	回転ナデ調整。	
112	高張 (口縫)	(度44) 16.0	10.3	口縫端部は平らで上に若干つまみ上 げられる。	回転ナデ調整。	
113	並	9.8	7.2	口縫から口縫にむかって外反してのび る。 II縫端部は外上方につまみ上げ丸くお さめる。	回転ナデ調整。	
114	兼	9.7	8.8	感部は口縫にむかって大きくなれる。 感部と体部の境は強いナデが施こされ る。	回転ナデ調整。	
115	兼	9.1	6.1	感部は口縫にむかってやや外反ぎみに 外上方にのびる。	回転ナデ調整。	
116	兼 (I縫)	9.0	4.4	口縫は外反しながら外上方にのびる。 II縫端部は尖り気味に上方につまみ上 げる。	回転ナデ調整。	

No	器種	口歯 (歯)	側面 (位)	形態の特徴	技法	備考	
117	椎		90	ゆるやかに内寄する門部に直立する頸部がつけられる。	回転ナデ調整。		
118	椎			ゆるやかに内寄する門部に直立する頸部がつけられる。	回転ナデ調整。		
119	茎			体部は周部に近でゆるやかに内寄する。	回転ナデ調整。		
120	茎 (底部)	(底径) 14.0	8.8	ハの字形の外台を付けた底部から外上方に直立的にのびた体部をもつ。	回転ナデ調整。		
121	茎 (底部)	(底径) 13.1	6.2	底部にハの字形高台を付ける。 体部は直線的に外上方にのびる。	体部下部は回転ヘラ削り。 底部は底台貼り付けのため回転ナデ調整。		
122	茎 (底部)	(底径) 14.8	5.7	半円状底部はハの字形の高台が付く。 体部は、ななめ外上方にむかって直線的にのびる。	底部外側と体部は回転ヘラ削り、高台取り付けに際しては回転ナデ調整。体部との接は、強くナヂる底部内面は、ほとんど太調整。		
123	茎 (底部)	(底径) 10.1	2.8	体部はやや内寄強度にたち上がる。 底部には、ハの字形高台が付く。	体部下部は回転ヘラ削り。 高台張りだけに際しては回転ナデ調整が加えられる。		
124	茎 (底部)	(底径) 13.1	2	半円状底部にハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ削り、高台取り付けに際しては回転ナデ調整。底部内面はナデ調整。調整の次の工具の表が連続してみられる。		
125	茎 (底部)	(底径) 8.8		体部は半丸な底部から直線的に外上方にのびる。	底部は回転ヘラ削り。		
126	幹		29.1	4.5	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は外反しながら上方に丸く立ち上がる。	回転ナデ調整。	
127	幹		18.5	4.5	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は外反しながら上方に丸く立ち上がる。	回転ナデ調整。 体部外側は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
128	幹		18.0	3.8	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は外反しながら上方に丸く立ち上がる。	回転ナデ調整。	
129	幹		17.5	3.7	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
130	幹		19.8	8.3	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外側は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
131	幹		20.2	6	肩部は内寄して口縫部につづく。口縫部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
132	幹		19.8	5.3	肩部から丸く内寄して口縫部につづく。 口縫部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 内面には回転ヘラ削りが認められる。	
133	茎		25.8	5.3	肩部から口縫にむかってゆるやかに外反し逆山形をもつ。(口縫部は、外下方につづき山形を丸くさめる。	回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
134	茎		25.8	3.5	肩部から口縫にむかってななめ上方に直線的にのびる。(口縫部は外下方につづき丸くさめる。	内外両ともに回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
135	茎		23.8	4.6	肩部から口縫にむかって直線的に外上方に強く立ち上がる。(口縫部は上方に丸く引き止す。	回転ナデ調整。	
136	茎		21.0	4.6	肩部から口縫にむかってゆるやかに外反する。 口縫部は尖り無縫に上下に丸く引き出す。	回転ナデ調整。	
137	茎		22.8	6.1	肩部から口縫にむかってななめ外方に直線的にのびる。(口縫部は外下方に体部内面は格子タキ。内面はタキを施こした後、入念なナデ調整。	回転ナデ調整。	
138	茎		22.0	18.4	肩部から口縫にむかってゆるやかに外反する。 口縫部は上方に丸くひき止す。	回転ナデ調整。 体部外側は格子タキ。内面はタキを施こした後、入念にナデをほぐす。	

%	種類	口径 (cm)	器高 (cm)	お魚の特徴	技術	備考
139	皿	13.0	2.8	体部はいったんななめ外方に直線内にのびた後、口附近で内寄する。口附近部は丸くおさめる。	岡松ナゲ調整	
140	梅 (口棘)	11.0	3.5	体部は、内寄しながら外上方へのびる。口附近部は、丸くおさめる。	口寄近くでは、ナゲ調整。 体部は、へラ門り内面はへラ巻き。	
141	楓	26.8	7.6	両立する体部にくの字形に細曲する口附近がつく。 口附近部は丸くおさめる。	上縁部外面はナゲ調整、背面は一部にハケ口調整。 体部外側は楓のハケ目調整、方向はナゲ調整。	



調査区遠景

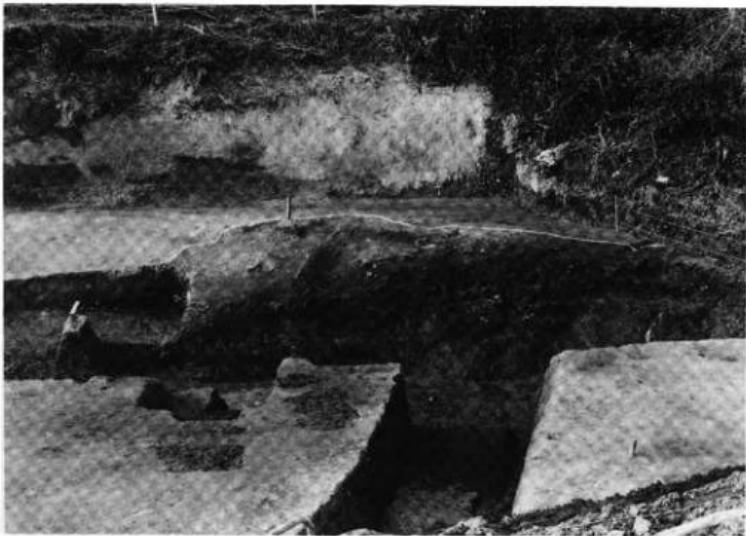


A 地区自然流路土層堆積状況（南壁）

図版 2



灰原検出状況（北東から）



灰原検出状況（東から）

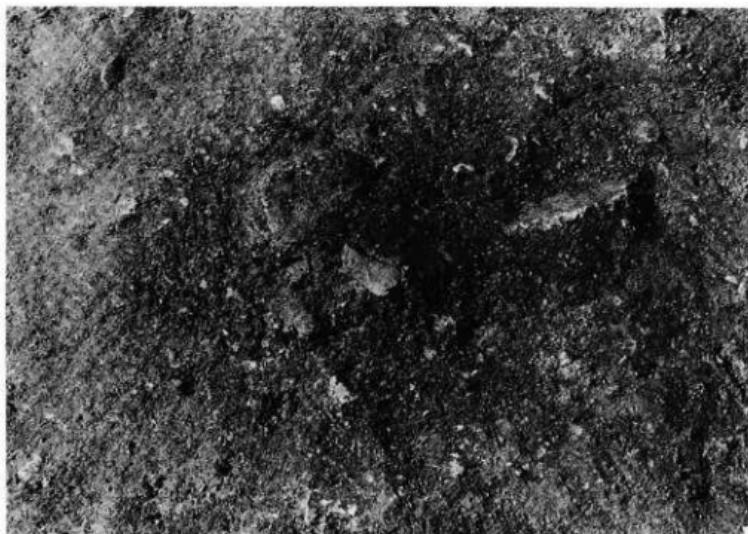


A 地区自然流路内土層堆積状況



同灰層堆積状況

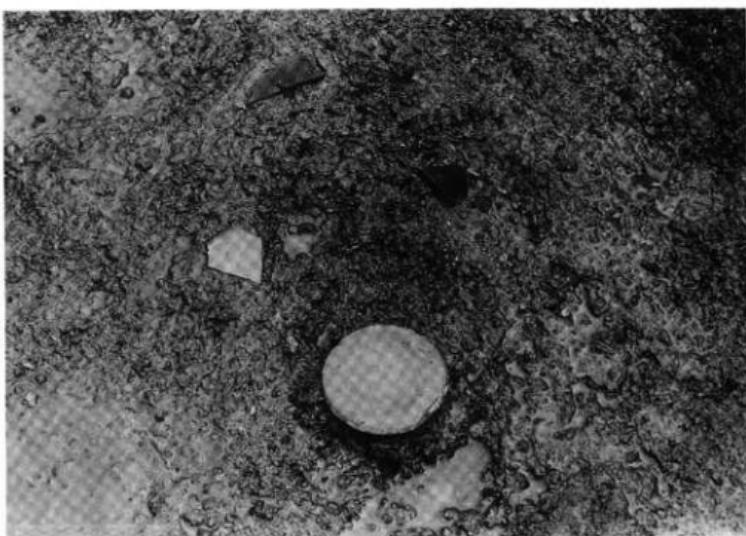
図版 4



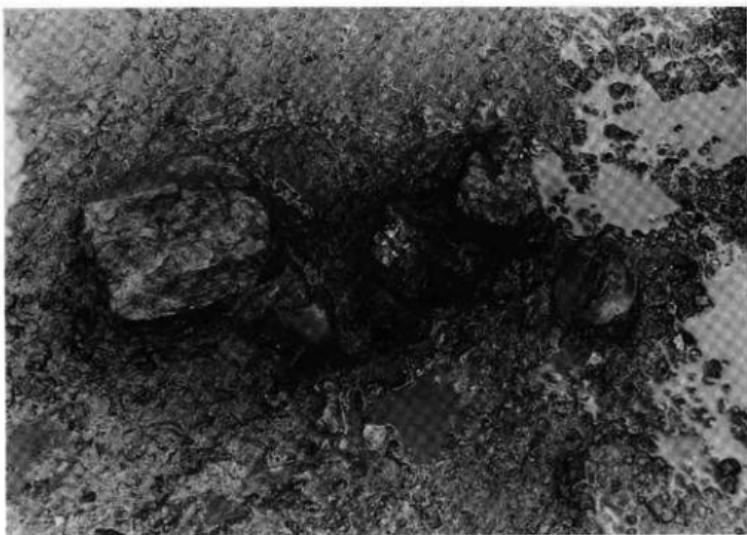
鉄斧出土状況



灰原内遺物出土状況

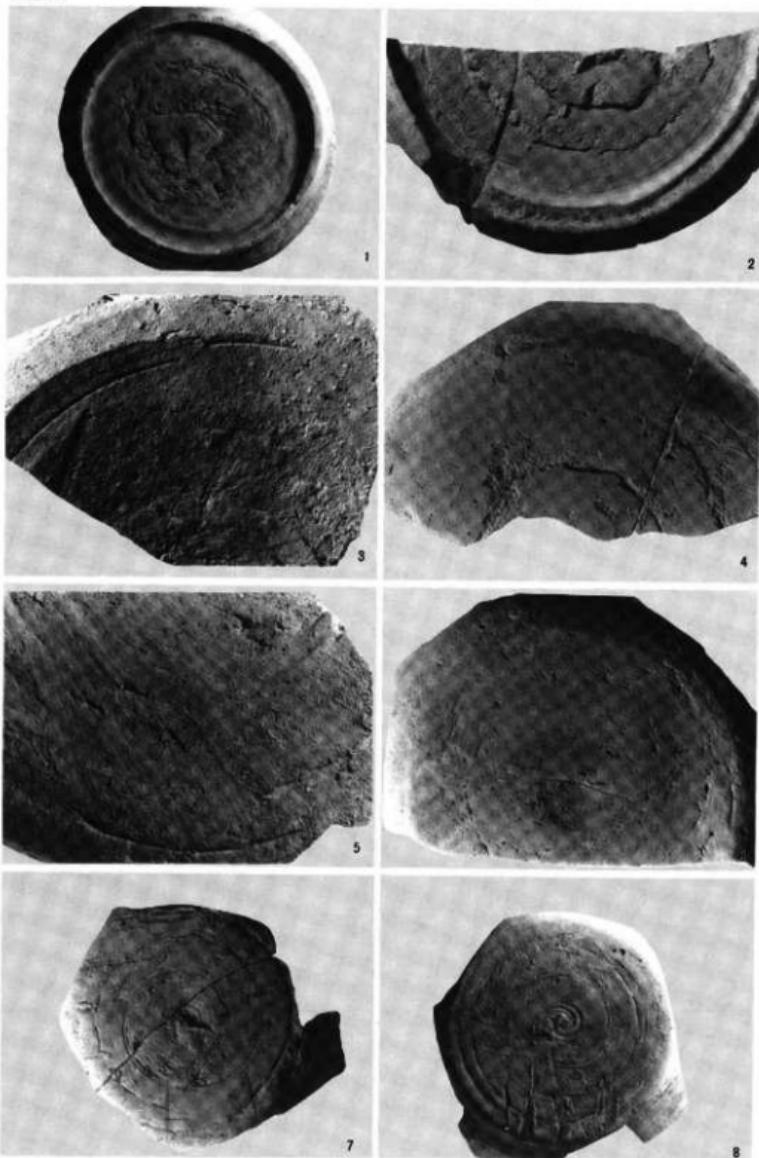


自然流路内遺物出土状況

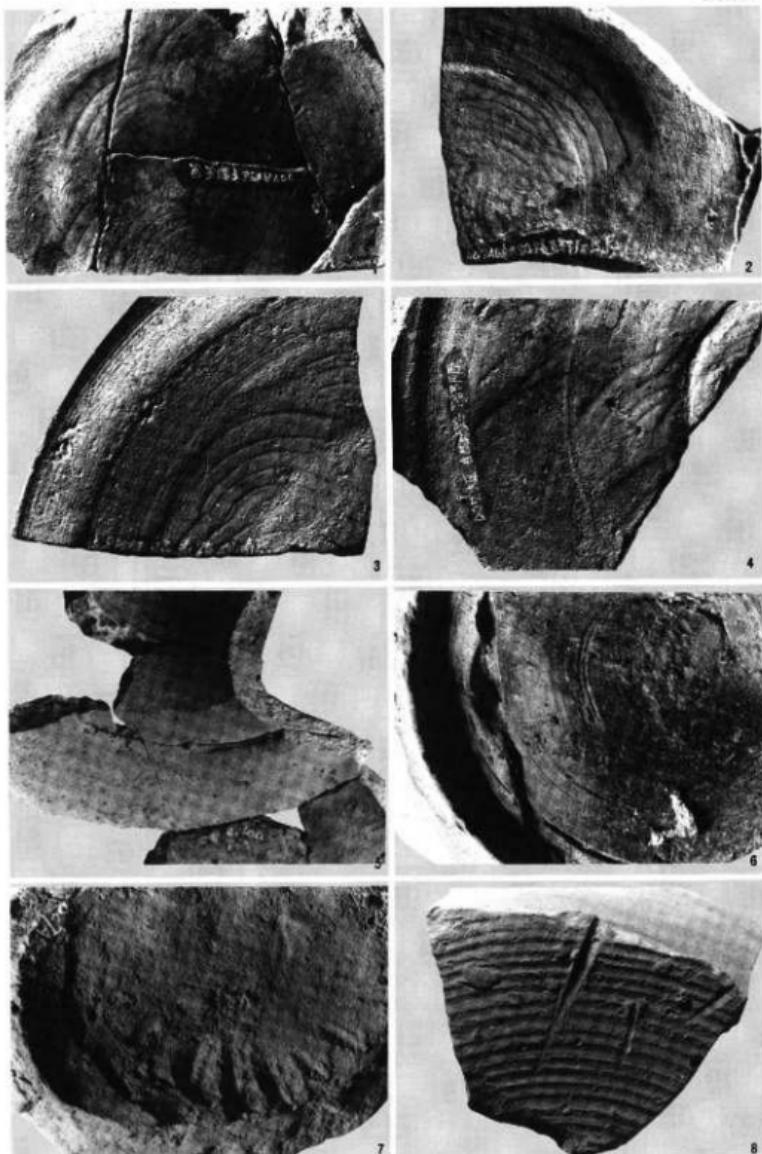


自然流路内遺物出土状況

圖版 6

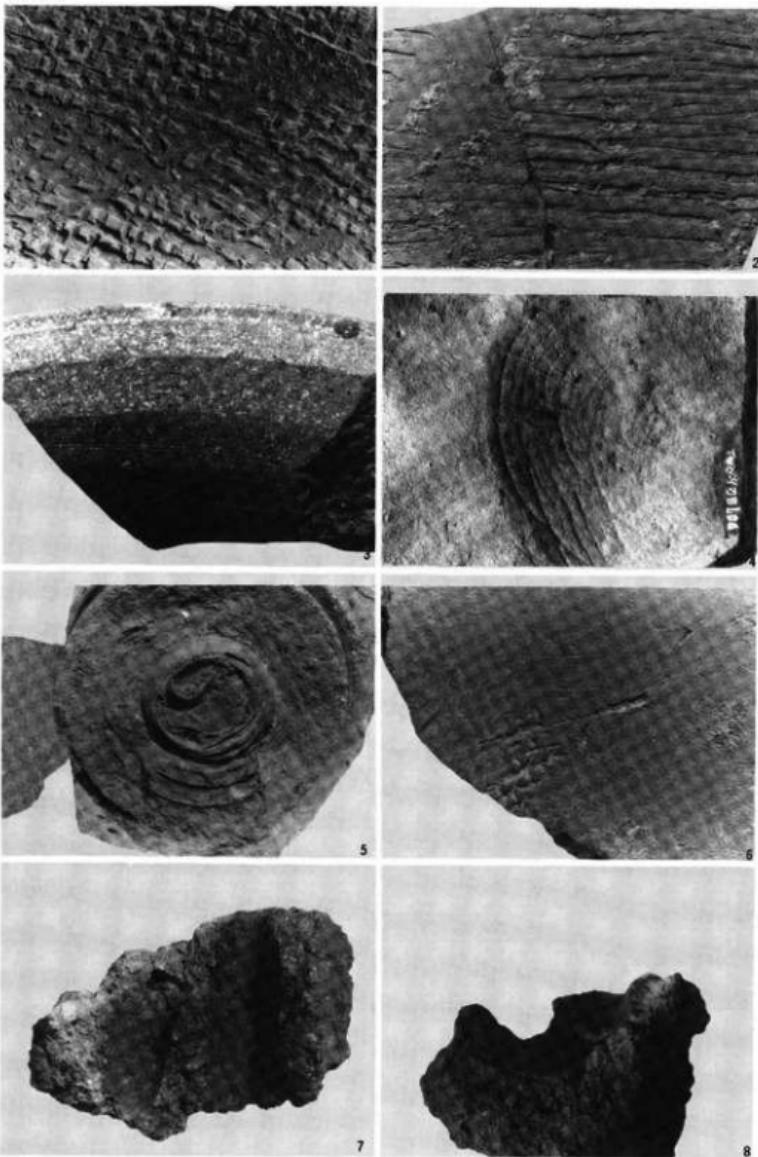


出土遺物 (1)



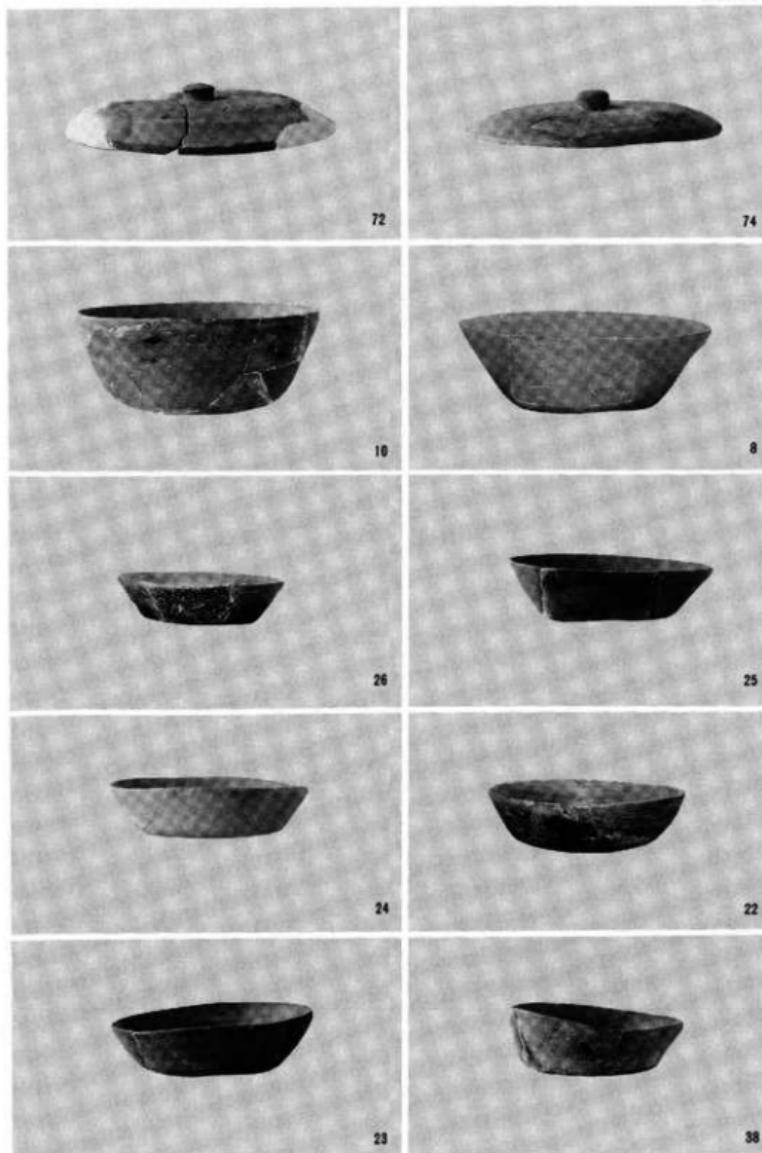
出土遺物 (2)

図版 8



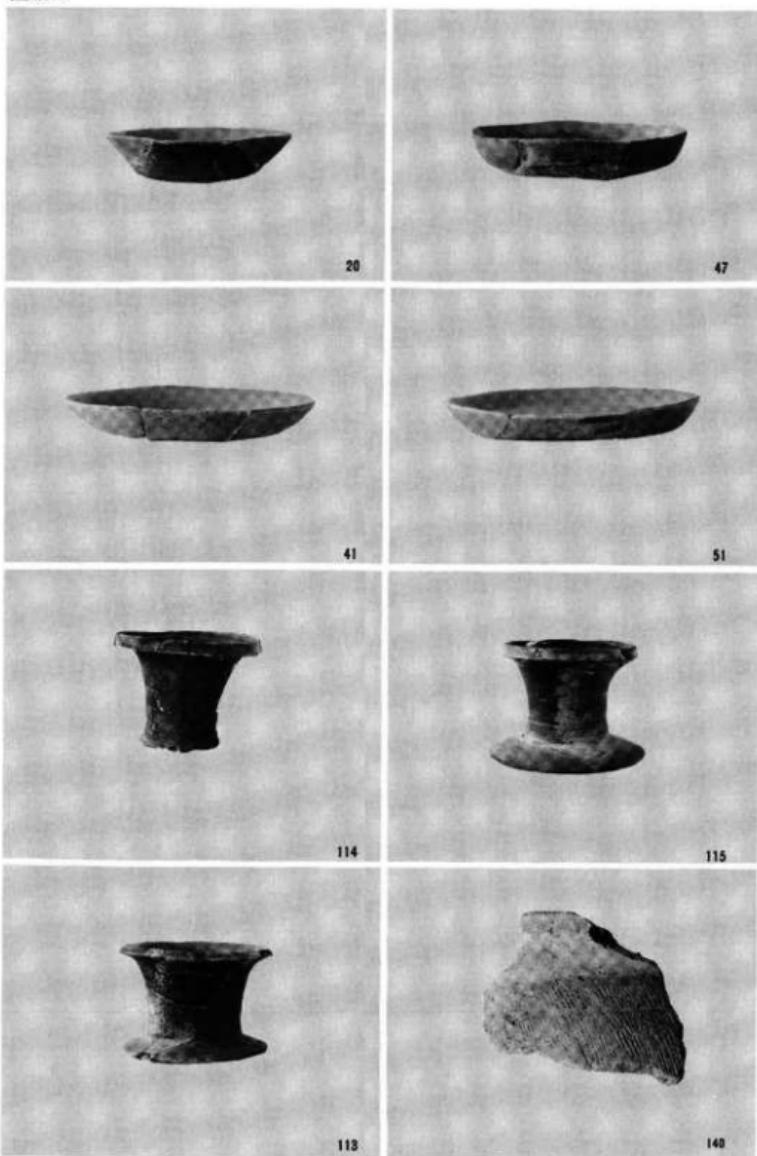
出土遺物（3）

図版 9

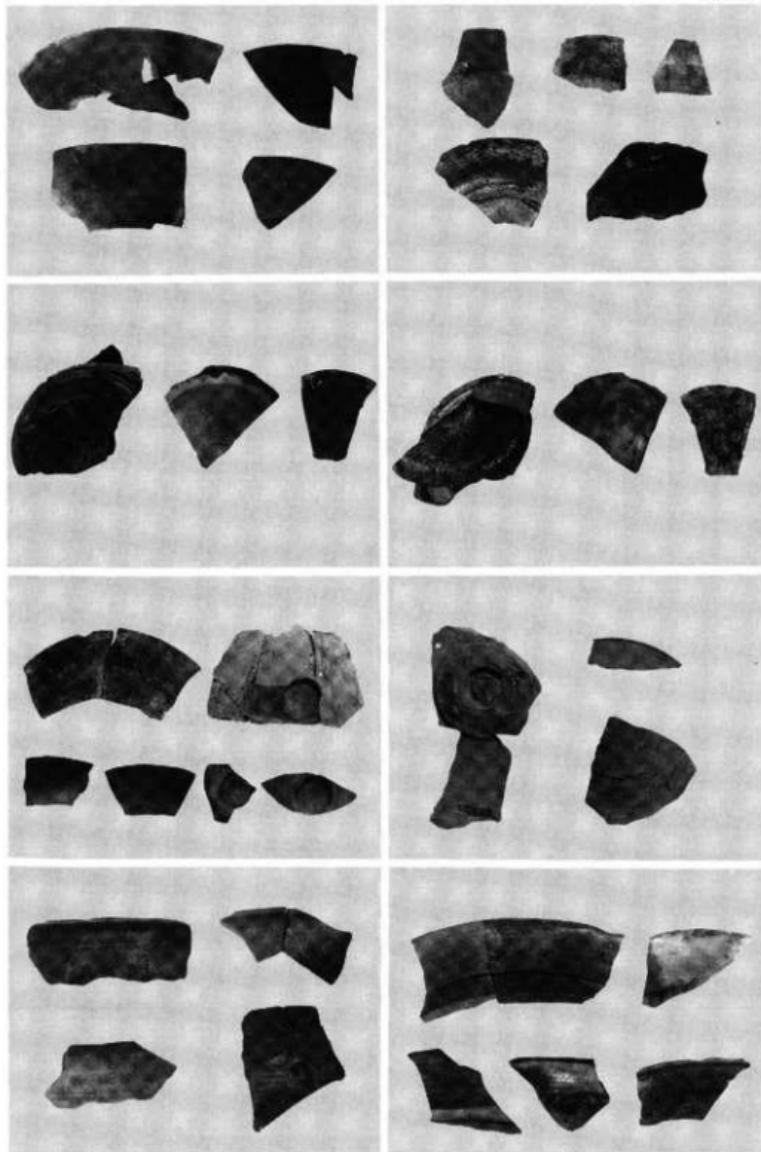


出土遺物（4）

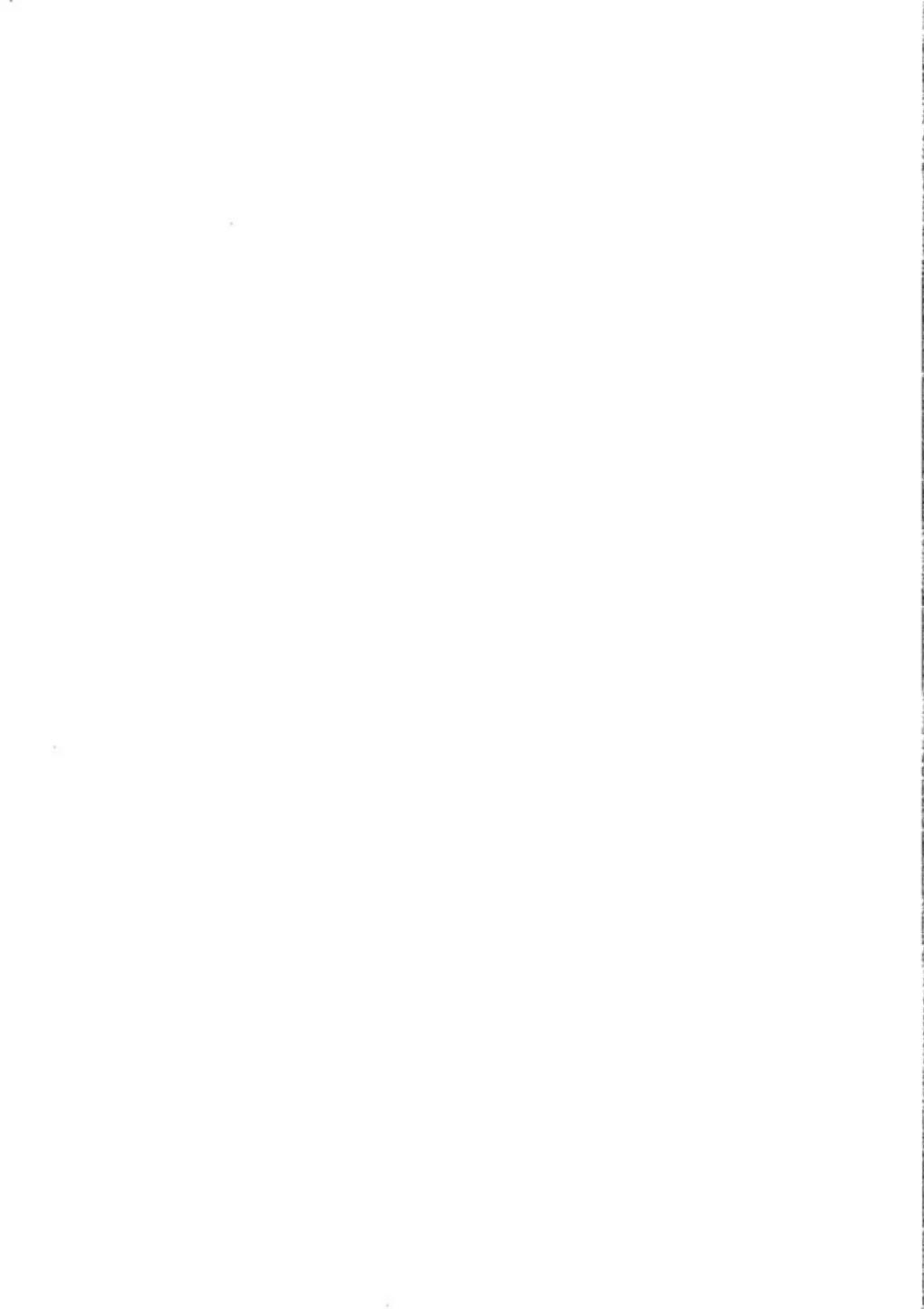
図版10



出土遺物（5）



出土遺物（6）



IV 椎ヶ丸～芝生遺跡

- 1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う椎ヶ丸～芝生遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査機関及び報告書作成の実施期間は次の通りである。
- 3 遺物番号、挿図番号はすべて通し番号とした。

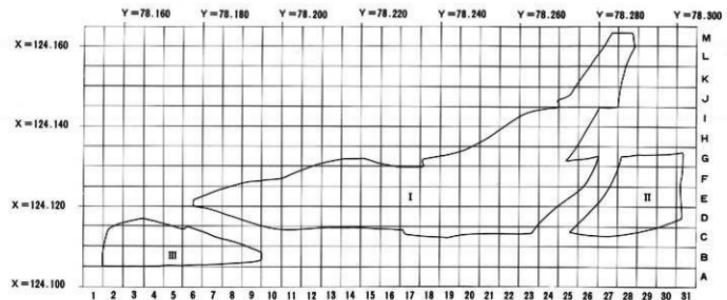
遺跡抄録

遺跡名	椎ヶ丸～芝生
読み	しいがまる～しばう
所在地	板野郡十成町古田字椎ヶ丸13-1他 X=124.25～124.165 Y=78.055～78.305
種別	集落
時代	旧石器・弥生・中世
主な遺構	堅穴住居跡・土坑
主な遺物	旧石器・弥生土器・石器

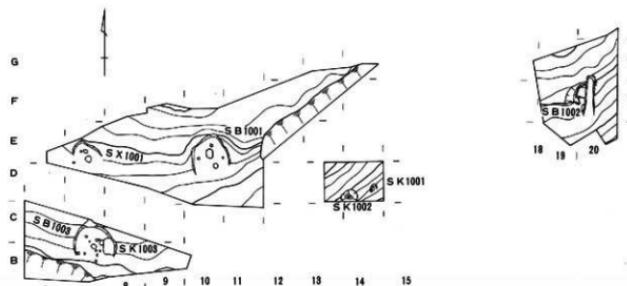


第1図 椎ヶ丸～芝生遺跡調査位置図

0
100m



第2図 椎ヶ丸地区グリッド配置図



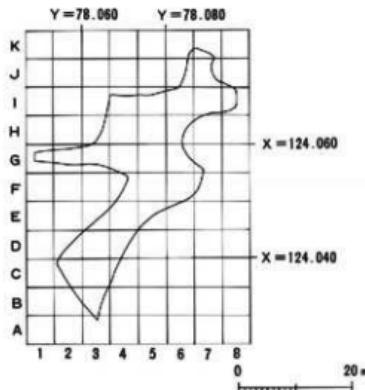
第3図 横ヶ丸地区遺構配置図



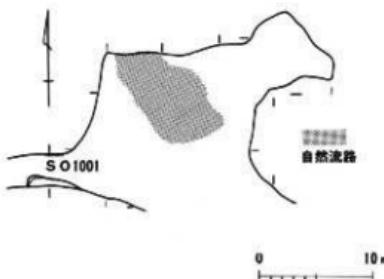
1 調査の経過

(1) 調査の経過

椎ヶ丸～芝生遺跡は標高90mの中位段丘面上の椎ヶ丸地区と、その段丘下の扇状地に位置する芝生地区の立地の異なる2つの地点によって構成されている。このうち、椎ヶ丸地区に関しては、1976年その存在が学会に発表されて以後、徳島県下最大の旧石器の遺跡として広く周知され、きわめて小範囲ではあるが県教育委員会文化課による調査も実施されている。これに対して芝生地区は從来全くその存在が確認されていなかった遺跡で、縦貫道予定地区内の分布調査が行なわれた際に遺物が採集がされたことから調査区域の中に組み込まれ、試掘調査対象地とされたものである。ただ、椎ヶ丸に関しても、路線が東西に延びる段丘崖上の勾配の強い斜面に設定されていることから調査の必要性が疑問視されたため、芝生地区とともに試掘調査を実施することとなった。両地区的試掘調査は10月15日から10月26日にかけて行われ、合計42本のトレンチが発掘された。その結果、椎ヶ丸地区からは斜面部でありながらナイフ形石器などの旧石器が、また、芝生地区からは瓦器や須恵質陶器などの中世遺物がそれぞれ出土したため、椎ヶ丸地区については3100m²、芝生地区については450m²を本調査の対象面積として決定した。



第4図 芝生地区グリッド配置図



第5図 芝生地区遺構配置図

(2) 発掘調査の方法

椎ヶ丸、芝生の二地区とも発掘調査の基準となるグリッドの位置は、発掘調査統一基準にならない第IV系国土座標を基準とし、5m×5mのメッシュを国土座標の線上に組み、南西の隅を基点として座標軸Xの線上にアラビア数字、Yの線上にアルファベットを記号として順に並び、グリッド名とした。また、これとは別に椎ヶ丸は、調査区が東西に走る町道と町道から段丘上に伸びる農道によって3箇所に分割されたため、それぞれにⅠからⅢまでのローマ数字をあてて区域名とした。

(3) 調査日誌抄

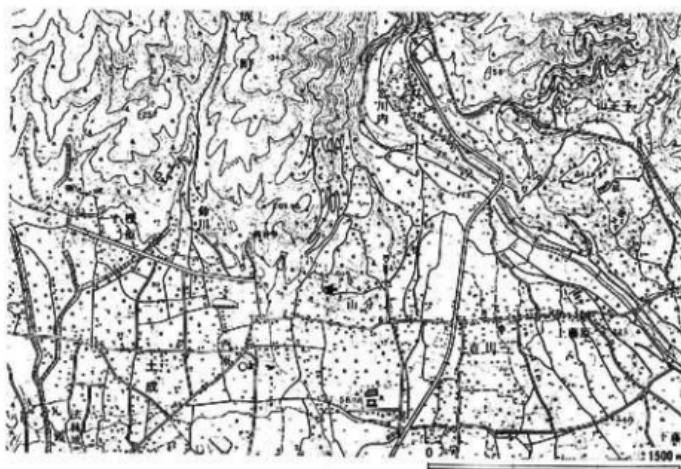
		東側の旧石器出土地点の精査を継続。
1990年		1月29日 芝生地区の機械掘削開始。
12月25日	起工測量の立ち合いの後、機械掘削開始。	1月30日 I区東側の旧石器の調査を終了。 同じI区の中央部で弥生時代の遺物が出土しはじめる。
1991年		
1月7日	I区の東側斜面部の人力掘削開始。	1月31日 I区A地点で上墳SK1001・1002を検出
1月9日	I区西側斜面の人力掘削開始。	2月1日 SK1001・1002の精査開始。芝生地区の人力掘削作業開始。
1月14日	I区西側斜面の人力掘削終了。	2月3日 III区人力掘削開始。
1月15日	I区西側人力掘削終了。	2月4日 I区東側の旧石器の平面図作製。
1月16日	I区西側でSX1001検出される。 II区の縄層中から旧石器出土。	2月5日 I区SB1001の振り下げ、SK1001・1002の振り下げ、図化作業終了
1月17日	I区西側で谷状の落ち込み確認。 部分的に深堀りを行った結果、旧石器が出土。	2月6日 II区の完掘状況の写真撮影。I区東側の旧石器出土地点の西側に新たに谷状の落ち込みを検出（以後B地点）。
1月18日	I区西側で弥生住居址SB1001検出。精査開始。	2月7日 I区B地点の谷状の落ち込みの振り下げ。
1月22日	I区の谷状の落ち込み（以後A地点）を本格的に振り下げ。表下1mで弥生土器が出土しはじめる。I区東側斜面の調査で旧石器出土。	2月8日 I区SB1001写真撮影終了。I区中央部に新たに住居址SB1002を検出。I区B地点の振り下げ終了。
1月23日	II区の土層図作製作業。	2月12日 I区SB1002の遺構検出状況写真の撮影。午後遺構振り下げ開始。
1月25日	II区の完掘状況の写真撮影。I区	

- 2月13日 S B1001周辺の地形測量。I区A地点の旧石器の精査終了。Ⅲ区で新たに住居址S B1003検出。
- 2月14日 I区S B1001周辺の地形測量終了。
Ⅲ区S B1003の検出状況写真撮影の後掘り下げ開始。
- 2月19日 I区S B1002の岡化作業。
- 2月20日 S B1002周辺の地形測量。I区B地点の掘り下げ終了。
- 2月21日 S B1003の精査中、床面から新たにSK1003を検出。
- 2月22日 I区B地点とその周辺地域の地形測量。
- 2月25日 芝生地区は出水が激しいため、作業を一時中断。
- 2月26日 I区B地点の遺物の出土状況写真と岡化作業。
- 2月27日 芝生地区の調査再開。
- 3月4日 芝生地区の遺構検出作業。自然流路1本と炭窯1個を確認。検出状況写真撮影後掘り下げにはいる。
- 3月5日 芝生地区の遺構掘り下げ作業終了。
S B1003光撮。
- 3月6日 S B100完掘状況写真撮影。I区A・B地点の土層図作製。
- 3月7日 Ⅲ区SK1003の平面図作製。芝生地区的炭窯岡化作業。
- 3月11日 芝生地区的遺構岡化作業終了。
- 3月12日 芝生地区的完掘状況の写真撮影。
- 3月13日 全ての作業を終了、センターに帰還。

2 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の地理的環境

今回の報告の対象となった椎ヶ丸～芝生遺跡は、阿讃山脈南麓の段丘上に位置する椎ヶ丸地区と、段丘崖下の扇状地が解析されて出来た小支谷の中に位置する芝生地区の2つの調査区から構成されている。椎ヶ丸は阿讃山脈から吉野川に向かって流れだす中小の河川の中でも比較的規模の大きい宮川内谷川によって形成された中位段丘上に位置する遺跡である。段丘面上の標高は約90m、下の扇状地との比高差は約25mほどを計る。宮川内谷川右岸に広がる段丘面は、段丘上を流れる小規模な河川によって解析された谷が扇状地に向かって何本か開いている。調査区が設定された地点は西側に延びた尾根と東側を流れる牛屋谷川の間に南に向かって扇状に広がる段丘崖を形成し、調査区の西側付近が最も南に張り出している。芝生地区はこの段丘崖にそって西から東に向かって開けた標高約70mの小規模な谷の中に位置している。現在は水田化しているこの谷は、通称、岡の山の麓を北から南に向かって流れる小河川によって解析されたもので、西側の熊谷川が形成した谷とは山裾から南にのびた微高地によって隔てられている。



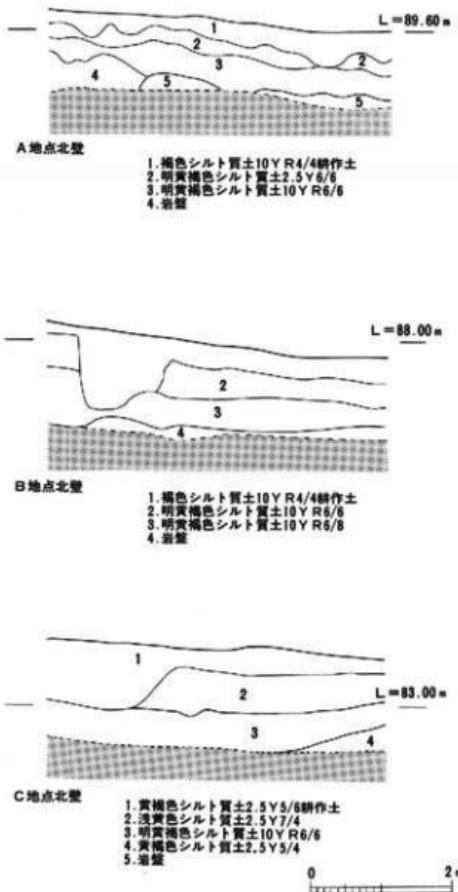
第6図 椎ヶ丸～芝生遺跡位置図

3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序

椎ヶ丸地区

椎ヶ丸地区については、1983年、高橋正則氏の報告がある。氏はこの中でこの段丘上で旧石器の出土する地点を4カ所あげている。今回の調査地点は高橋氏報告の第2地点の南東部から第4地点の北側にかけてと思われる。高橋氏はこの第2地点で断面の露頭観察を行い基盤の和泉層群までを表土を含めて4層に分けて報告している。今回の調査はこの第2地点の一部を調査区の中に含んでいるが、高速道路の路線が東西に延びた不安定な段丘崖縁辺部を斜めに横切るように設計され、調査区自体が地点によってかなり比高差のついた斜面上に設定されることになり、地点ごとに土層の堆積が複雑に変化することが考えられた。遺跡の中を通る2本の道路によって3カ所に分かれる調査区のうち、段丘崖上に東西に長く



第7図 椎ヶ丸遺跡基本層序

延びるⅠ区と東側に道一つ離れて隣接するⅡ区は、調査区の西側付近で段丘崖が最も南に張り出し、東の牛屋谷に向かうにつれて緩やかに弧を描きながら北東に延びている。この一見などから見える段丘崖も調査してみると浸食作用の為か崖線の至るところで凹凸が認められ、風化の進んだ泥岩質の和泉層の岩盤が浸食作用を受けてUの字状に切れ込んだ地点が認められた。Ⅰ区西側のE 6~11からF 8~11グリッド付近にかけては段丘崖が南に向かって尾根状に張りだしているために土壌の堆積が薄く、30~40cmで基盤の和泉層群の泥岩層に達している。この岩盤はこれから東に向かうにつれ徐々に南東方向に下がっているが、途中D・E 16グリッド付近ではいったん隆起して南南東に延びる小規模な突出部を形成している。このD・E 18~20グリッド付近ではE 7~11からF 8~13付近より更に土壌の堆積が少なく、表土層を除去した時点で岩盤が現れると言う状況がしばしばみられる。この状態はD~G 21グリッド付近まで続くが、これより東側のD~I 22~25で岩盤は一度大きく段丘側に切れ込んで埋没谷的な地形を形成し、その後再びB地区の牛屋谷に向かうにつれて緩やかに南に張りだしている。先述したように、調査区の多くが段丘崖線上に設置されたため調査区全体の堆積が不安定な状況で、黄褐色のシルト質土壌に大小の砂礫が多量に混入している状況が殆どである。ただ、埋没谷的な状況のD~F 15~16やH・I 22~26付近では他と比較すると土壌の堆積が厚く、特にⅠ区では1層から5層に分けられる土層の第2層が弥生の遺物包含層、3層上面が弥生の遺構検出面、3層と4層が旧石器の遺物包含層という状況を観察することができた。

芝生地区

芝生地区的土層の堆積は比較的単純で、地表下30~35cmまでは4枚の水田土壌の堆積が認められた後、5層目に灰

黄色砂質土、6層目に暗

灰黄色砂質土層という扇

状地上の自然堆積層が続

いている。このなかで第

5層の灰黄色砂質土層中

からは瓦器や須恵質土器

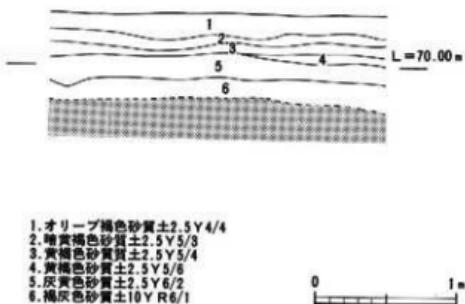
などが出土し中世の遺物

包含層であることが確認

されたが、6層中からの

遺物の出土はなかった。

ただ、6層上面で検出さ



第8図 芝生地区基本層序

れた自然流路の中からは弥生土器と石鎚が出土し、少なくとも6層が弥生時代またはそれ以前に堆積した層であることが認められた。しかし、それ以下は涌水のために調査が不可能となつたため、今回の調査は第6層まで終了することとした。

(2) 検出された遺構と遺物

椎ヶ丸地区

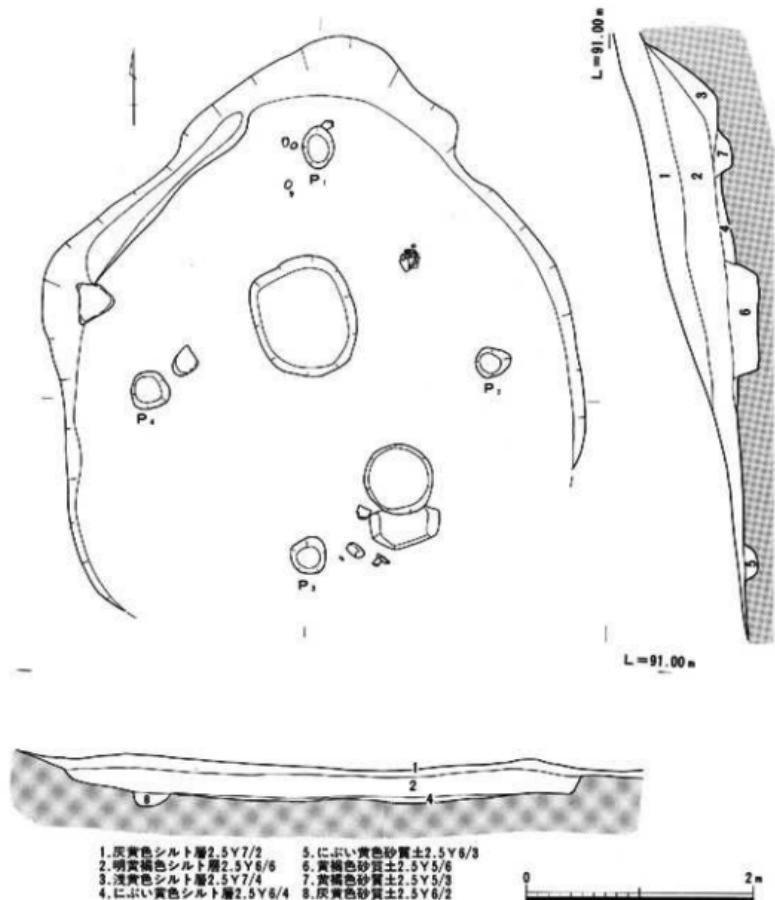
弥生時代の遺構と遺物

1978年の県教育委員会文化課の発掘調査の際には、今回の調査区より北の段丘中央寄りの地点でナイフ形石器、尖頭器、石鎚などを含む500点余りの石器と若干の弥生土器、上師器が出土しているが、今回の調査区内のC地区付近でも1983年頃に農道の切り通しの断面から弥生土器の甕が採集されている。このため、今回の調査でも弥生時代の遺構や遺物の出土する可能性が考えられていた。調査の結果は、当初の予想どおり弥生時代中期から後期にかけてと考えられる住居跡3軒と土塙3基、性格不明の遺構1基、それに弥生土器を中心とする遺物若干を得ることができた。遺構は住居跡1軒を除いて主としてA地区西側からC地区にかけての、段丘崖が南に向かって突出している地点に集中している。遺構検出面は段丘崖線上の斜面という条件のため、土壤の堆積の不安定な地点が多いが、他と比較して土壤の堆積が厚い埋没谷状の地形の中に位置するSK1001と1002は、旧石器しか含まない黄褐色砂質土の上面から検出されている。

整穴住居跡（SK1001）（第9図）

標高91m付近の段丘崖の斜面上のD・E-10~11グリッドにまたがって検出された直径約4.5mの不整齊円形のプランの遺構である。住居跡は北から南に向かって傾斜している斜面に作られているため、北側の壁は掘り方が比較的明瞭に残っているが、南の低い方は壁と床面の一部を流失している。また、残された壁自体も崩落のためか形が若干いびつになっている。床面の中央部からやや北寄りに長さ1m・深さ50cmの梢円形の炉が設けられ、周りに柱穴と考えられるピットが4個認められる。またこれとは別に、南側の床面には直径60cmほどの浅い穴が掘られ、その横には台石として用いられたと思われる大型の砂岩の円礫が床面を若干掘り込んだ状態で据えられていた。この他にも北西の壁際で周溝とみられる掘り込みが検出されたが、ごく一部に見られるだけであった。

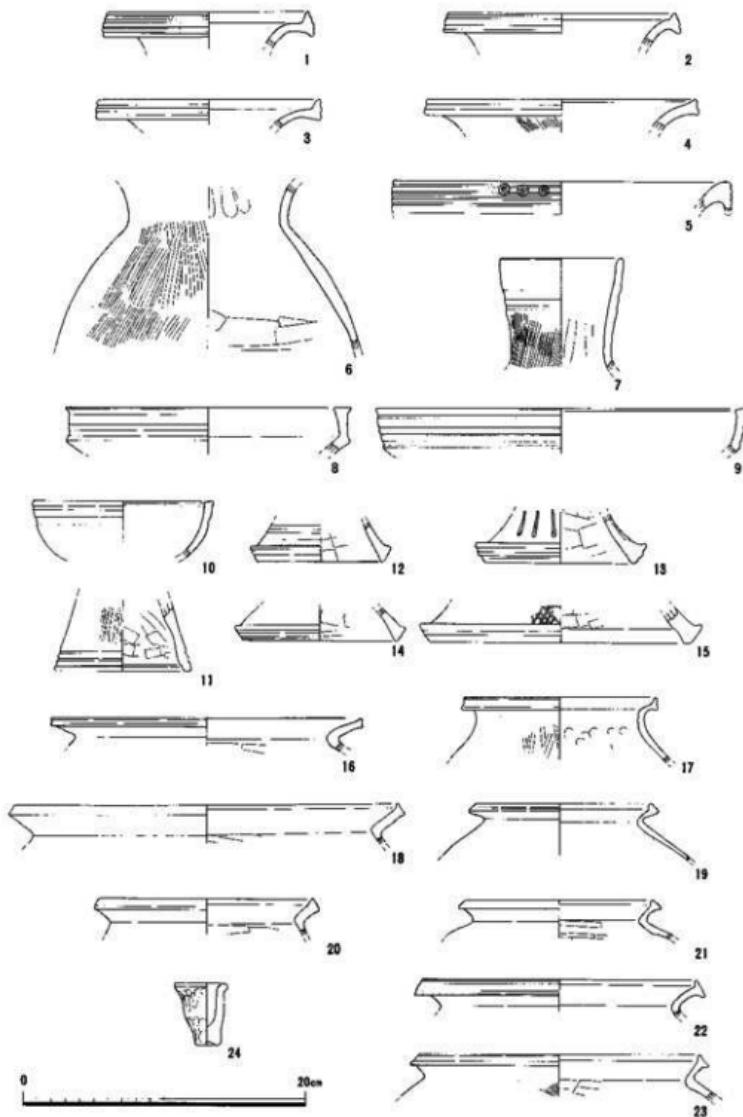
遺構内からの遺物の出土は土器を中心にかなりの点数にのぼるが、何れも小片のものが大部分を占め、図示できたものがごく僅かである。



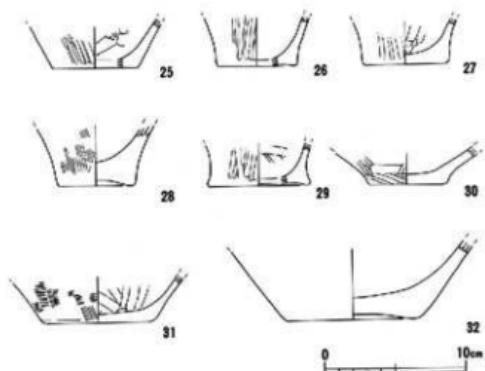
第9図 SB 1001実測図

出土遺物（第10～13図）

1～6は広口壺の破片である。口縁端部を上下に拡張し回線文を巡らせたものが多いが、中には5のように口縁端部を下方へ著しく垂下させたものも出土している。7は直口壺の口縁部の破片で、僅かに内湾しながら上方に向かってのびる口縁の端部は尖り気味に仕上げられ、口縁からやや下がった位置には浅い凹線が巡らされている。8～10は高杯の杯部、11～

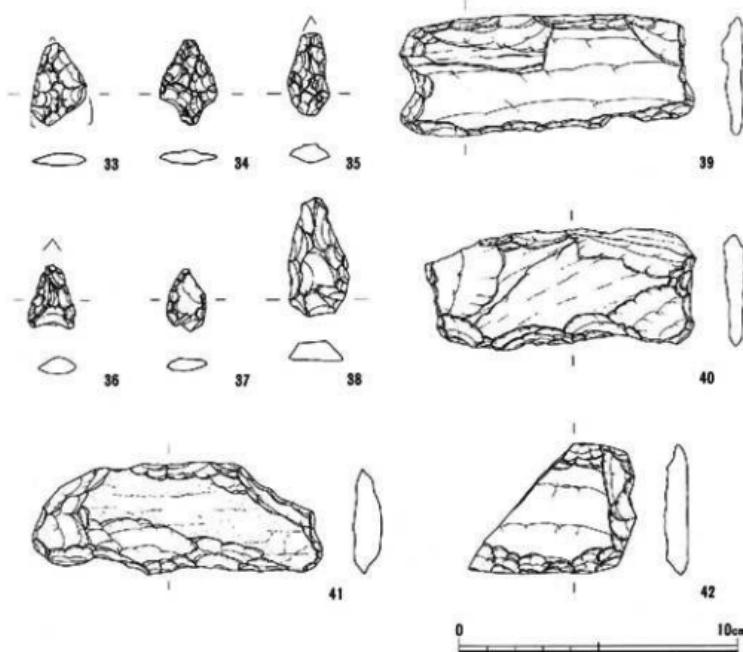


第10図 SB 1001出土土器実測図



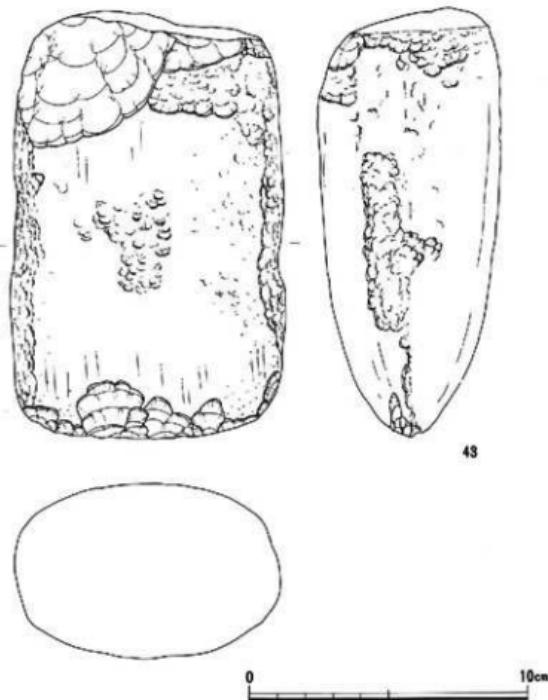
第11図 SB 1001出土土器実測図

14は同じく高杯の脚壠部の破片である。8は口縁部の屈曲が顕著で縫をもち、直立する口縁の端部は内外に拡張されて平坦に仕上げられている。9は8と比較して口縁部の立ち上がりの屈曲の度合いが弱く、口縁端部の拡張もごく僅かである。11は楕状の杯部をもつ高杯で口径は13cm足らずと小型のものである。2点とも口縁部に凹線を巡らせてい



第12図 SB 1001出土石器実測図

る。脚端部は11を除いて何れも端部が上方へ拡張され、そこに凹線が巡らされたり強い横ナデが加えられている。また、脚部には格子目文や長い三角形の透かしが入れられている。11は脚端部が拡張されずに丸く收められ、凹線が付けられている。甕も出土点数は多いが全形を伺えるものは皆無で、器面調整などの詳細は不明なものがほとんどである。口縁部の形態から分類を試みると、大まかに口縁の断面が方形のもの、口縁端部が上方にのみ拡張されるもの(17~20)、端部が上下に拡張されるもの(21~23)の3種類に分けられ、何れの形態のものにも端部に凹線が付けられる個体がある。また、胴部内面のヘラ削りも観察できるものについては頸部との境まで及んでいるものが大半を占めている。24はミニチュアの壺形土器で全面に指頭圧痕が残されている。石器はサヌカイト製の石鎌と、結晶片岩製の石包丁を中心とする石器組成が認められ、他に大型蛤刃石斧や楔形石器などが出土している。6点出土している石鎌のうち形の明かなものは凸基有茎式のもの1点(34)、凸基無茎式のもの1点(35)、凹基無茎式1点(36)の3点で、他は未製品と思われるものの2点(37・38)、基部が破損しているため形態が不明なもの1点(33)となっている。この凸基無茎式のものについても先端部を欠失している(1)。結晶片岩製

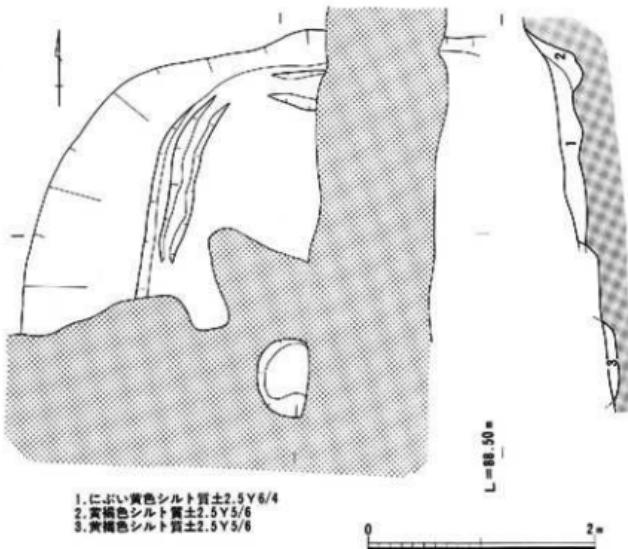


第13図 SB 1001出土石器実測図

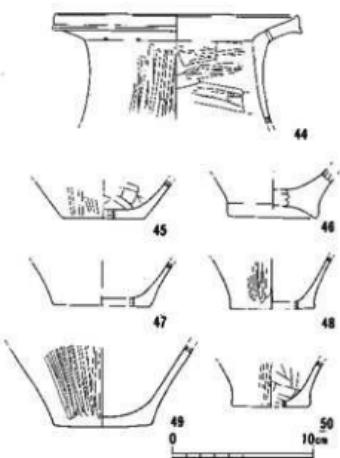
の打製石包丁は4点出土しているが、方形に近い形状に整えた結晶片岩の剥片の両端に抉を入れたものが、身部の半分を欠失している1点を含め3点出土し(39・40・42)、もう1点(41)は不整形な四辺形の形態に整えられている。43は石材は不明だが大型の始刃石斧を転用した叩き石で両側縁と刃部、それに身部中央に敲打痕を大きく残している。恐らく何等かの原因で刃部の再生が不可能になったための処置であろう。このほか、覆土や床面からは多くのサヌカイトの剥片に混じって楔形石器も何点か出土している。

竪穴住居跡 (S B 1002) (第14図)

S B 1001から約45m離れたF-20グリッドの斜面上に位置する遺構である。遺構の検出された斜面部は基盤の岩盤が大きく南側に向かって張りだした地点で土壤の堆積状態が不安定で流失しやすい場所である。遺構は表土直下の浅い位置から検出されたため遺存状態は極めて悪く、南東部分は既に壁面はおろか床面までが流失してしまっていたのに加え、残った遺構の中を果樹栽培に伴う溝状の擾乱が走り、北西側の壁を中心に全体の四分の一足らずが残されていただけであった。このため、遺構の正確な大きさなどは不明であるが、残された遺構から推測すると恐らく直径5m前後の円形に近いプランをもつものであったと考えられる。



第14図 S B 1002実測図



第15図 S B 1002出土土器実測図
て稜をもつ。45～50は壺または甌の底部で、平底意外に上げ底のものも見られる。調整は外
面がヘラ磨き、内面はヘラ削りのものが多い。

残された床面からは周溝の一部や浅い土壠らしい落ち込みの痕跡が検出されたが柱穴の数や位置などは全く不明である。また、壁面も傾斜地という不安定な場所のためか西側部分などに大きく崩落した所がみられた。

出土遺物（第15図）

遺構自体の遺存状態が極端に悪いことを反映して遺物の出土数も少なく、弥生土器が小片で検出された意外はサヌカイトの剝片が若干出土しただけで、石器に関しては製品となるようなものは出土しなかった。44は筒状の頸部と、上下に拡張された端部に凹線文的な横ナデが加えられた直線的な口縁部を持った壺で、口縁部と頸部の境はくの字形に屈曲し

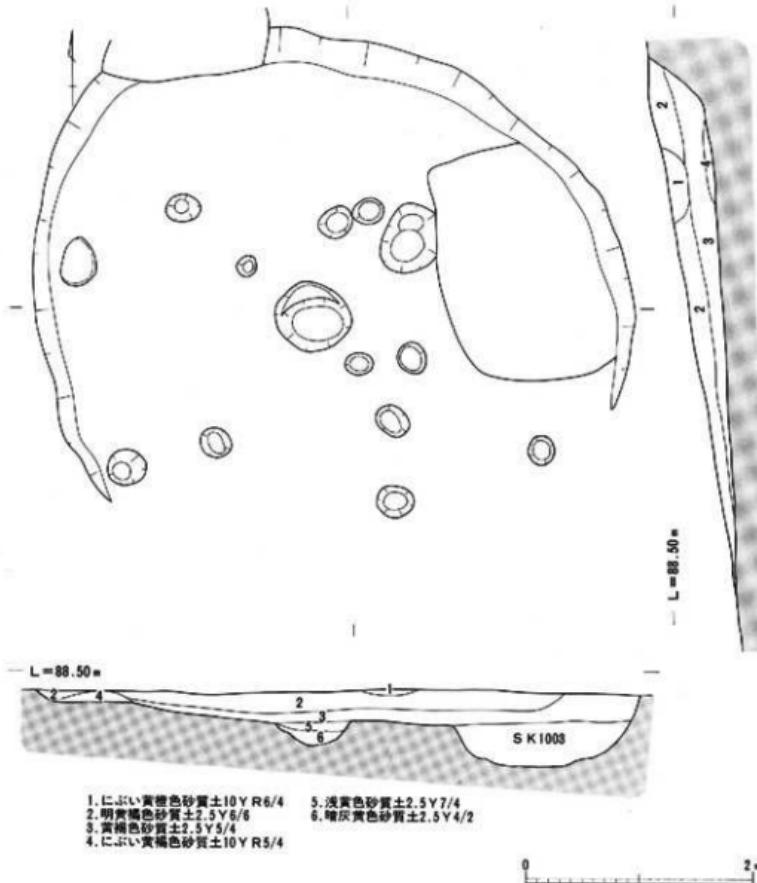
竪穴住居跡（S B 1003）（第16図）

S B 1001の南西のⅢ区の斜面上から検出された遺構で、この住居跡のすぐ南側で斜面は崖となって下の谷にむかって大きく落ちこんでいる。他の二つの住居跡と同様、傾斜地に遺構が掘り込まれているため比高の高い北側は壁面の立ち上がりは明瞭であるが、南側三分の一は流失して検出できなかった。直径約5mの大きさで、円形に近いプランを持っていたと考えられる住居跡の床面には柱穴を含む11のピットが検出され、中央部付近には直徑約60cm・深さ約20cmの炉址が設けられている。また、東側の壁際には長さ約2.1m・幅1.4mの集石を伴う上壙SK 1003が検出されている。1001・1002で検出された周溝は精査したにもかかわらず発見できなかった。北側の床面上には黄褐色上が低い土手状の高まりとなって帯状に連なっている部分が認められたが、自然にできたものか人為的なものは不明である。

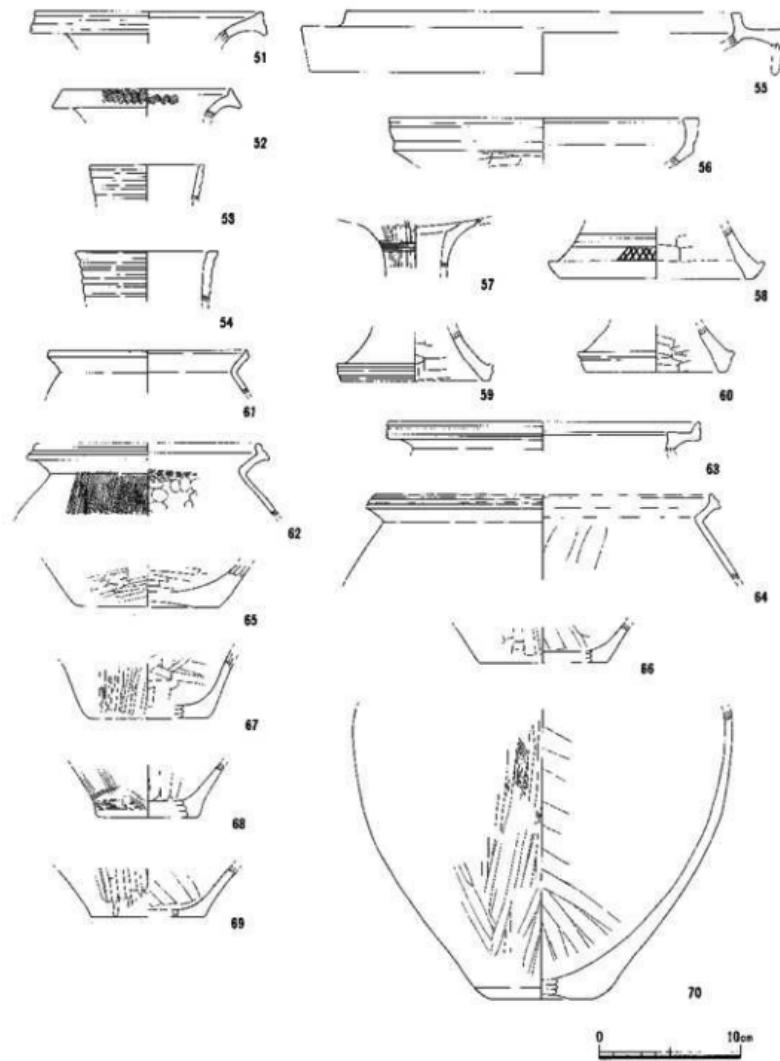
出土遺物（第17～18図）

1001同様に土器を中心とした遺物の出土数は多いが、細片のものが大部分で図示できたものはごく僅かである。51・52の壺はいずれも口径が20cmに満たない巾、小型の広口壺で口縁端部を上下に拡張する形態のものであるが、51では拡張された端部に凹線文を巡らせているのに

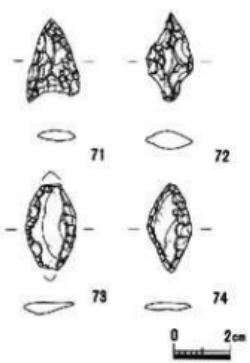
対して52では櫛指の波状文が描かれ、口縁内面にも同様の文様が付けられている。53・54は筒状の口縁を持つ直口壺で、54の口縁端部は平坦に仕上げられている。何れも口縁直下から凹線文が始まっている。55・56と57～60はそれぞれ高杯の杯部と脚部である。55は水平口縁の口縁端部が幅広く下方に垂下するもので、縦内あるいはその周辺部からの搬入品であろう。56は口縁部が稜をもってやや内湾ぎみに上方に立ち上がり凹線文が巡らされている。58～60の脚端部は上方に拡張され、横ナデや凹線文が巡らされている。57の脚柱部には平行直線文、



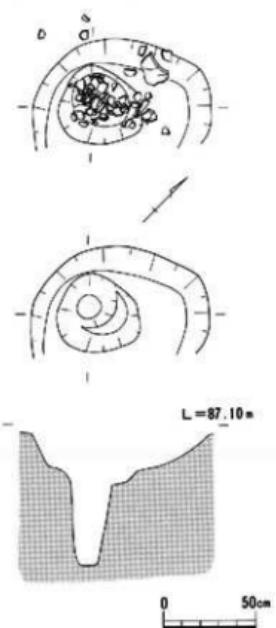
第16図 S B 1003実測図



第17図 S B 1003出土土器実測図



第18図 SB 1003出土石器実測図



第19図 SK 1001実測図

58の脚端部付近には格子目文が付けられている。蓋にはSB 1001同様、口縁端部の形態が61のように方形に作り出されるものと、62のように上方にのみ拡張されるもの、63・64のように上下に拡張されるものの3種類が出土している。また、住居址の床面からはサヌカイトの剥片がかなりまとまって出土しているが、楔形石器以外の製品は石鎌が4点出土しているだけで打製石刀などは見つかっていない。4点のうち、71が凹基無茎式石鎌、72が凸基有茎式石鎌、73～74が凸基無茎式石鎌にそれぞれ分類される。

土壤 (SK 1001) (第19図)

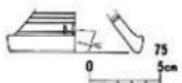
SB 1001と1002が検出されたI区の段丘面突出部の東側の埋没谷状地形の斜面から発見された遺構である。北西から南東に向かって落ちる斜面上に位置するため、地形の高い北西側の壁は掘り込みが明瞭に残されているのに対して南東側は流失しているが、長さ約1m・幅約70～80cm以上の大きさの楕円形のプランを持つ遺構であったと考えられる。最も深いところでも20cm足らずの底面には、更に直径20cm・深さ40cmほどのピットが掘り込まれている。遺物はこのピットの埋積土を中心に弥生土器がかなりの点数出土しているが、小片のため図示できたものは高杯の脚部1点だけである。

出土遺物 (第20図)

75は高杯の脚端部の破片である。上方に拡張された端部は横ナデ調整が施され、脚の裾部分にはヘラによる平行沈線と刺突文がつけられている。

土壤 (SK 1002) (第21図)

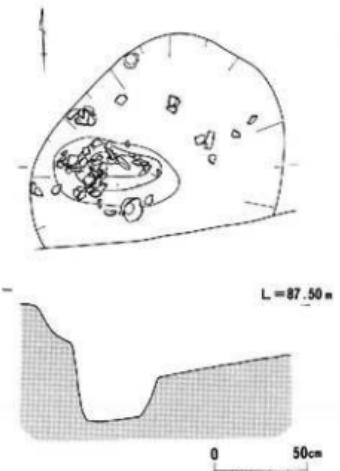
SK 1001の西側に隣接して検出された土壤である。南側の一部が調査区外に伸びているため正確な大き



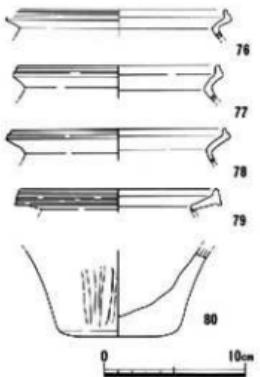
さは明らかではないが長さ1.5m以上・幅1.2m前後の規模の楕円形のプランの遺構だと考えられる。SK 1001と同じ斜面上に掘り込まれているため、南東側の立ち上がりは不明瞭で遺構の

第20図 SK 1001出土土器実測図 中心に向かってだらだらと落ち込んでいる。この土壇の底にも

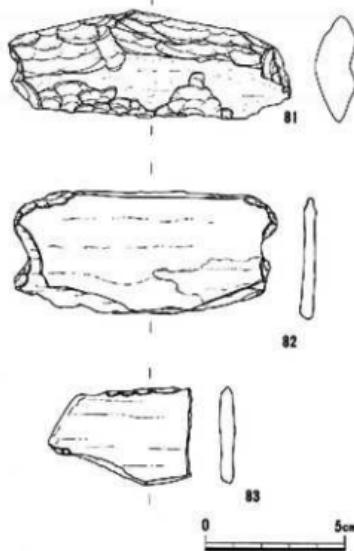
SK 1001同様、長さ約70cm・幅約30cm・深さ30cmのピットが掘り込まれている。またSK 1001もそうであったがピットの埋積土中には焼土に混じって多量の炭化物が出土している。両土壇ともどの様な目的のもとに作られたものか推測しがたい遺構である。



第21図 SK 1002実測図



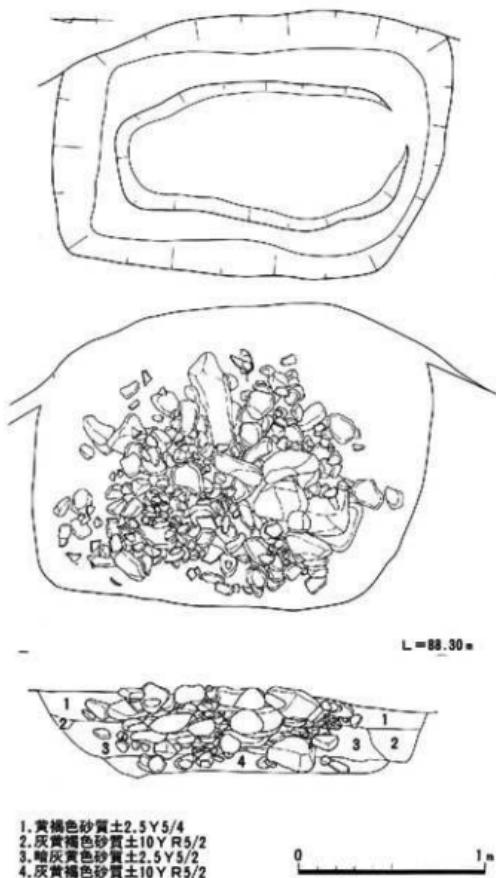
第22図 SK 1002出土土器実測図



第23図 SK 1002出土石器実測図

も出土している。76～79は甕の口縁部の破片である。79以外は口縁端部を上方に拡張し、そこに凹線を巡らせている。口縁の外面とも横ナデ調整が施されているが胴部以下は不明である。79は口縁端部を上下に拡張し凹線を加えたもので、口縁内外面の調整は他の甕と同じく横ナデ調整が施されている。胴部以下は不明であるが、この形態の口縁をもつ甕には外面に叩き目が施されるものが多い。石器は打製石包丁が3点出土している。81は粘板岩を用いたと思われるもので、片面に自然面を残す厚みのある素材を用い、全体にんぐりとした

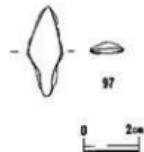
印象を受ける。両端に抉を入れる形態のものであろうと考えられるが、片方の抉は不明瞭である。82・83は結晶片岩製のもので、81同様、片面に自然面を残す素材を用いている。83は破損がひどく形態は不明であるが、82は両端に抉を入れた形態のもので、いずれも刃部などへの加工の度合は低い。



第24図 S K 1003実測図

土壤 (SK 1003) (第24図)
 住居跡 S B 1003の東側の床面から検出された長軸方向の長さ2.1m・幅1.6m・深さ45cmの隅丸方形のプランを持った土壤である。他の2基の土壤と異なり、横面の立ち上がりが明瞭でプランもはっきりしている。また、遺構内に意図的に多量の礫が投げ込まれた集石造構もあるが、同様の集石を伴う土壤は周辺の弥生遺跡でも検出例は少なくなっている。この土壤の床面は一部が更に掘り込まれ、同じように

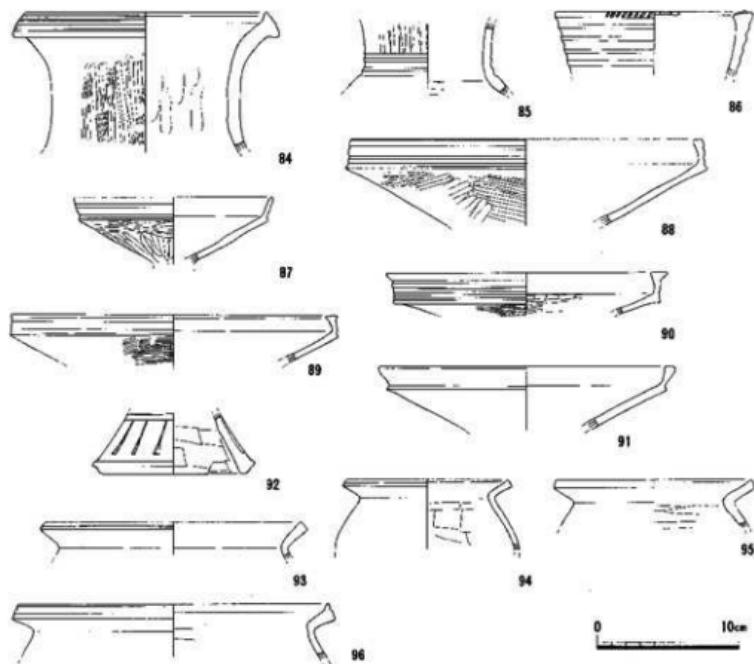
跡がはいっていた。遺物の多くはこの集石の間から出土している。この様に集石を伴う弥生時代の土壌は中期後半から後期初頭にかけての時期に吉野川北岸地域で検出例が多く、一般的に何らかの祭社に関連する遺構としてとらえられているものである。



第25図 SK 1003出土鉄器実測図

出土遺物（第25～26図）

遺物は弥生土器の破片が多数出土したが、他の遺構同様、小片が多い。84・85は中小型壺の口頭部の破片である。84の口縁は筒状の頸部から斜め外方に緩やかにのび、口縁端部は上下に拡張され凹

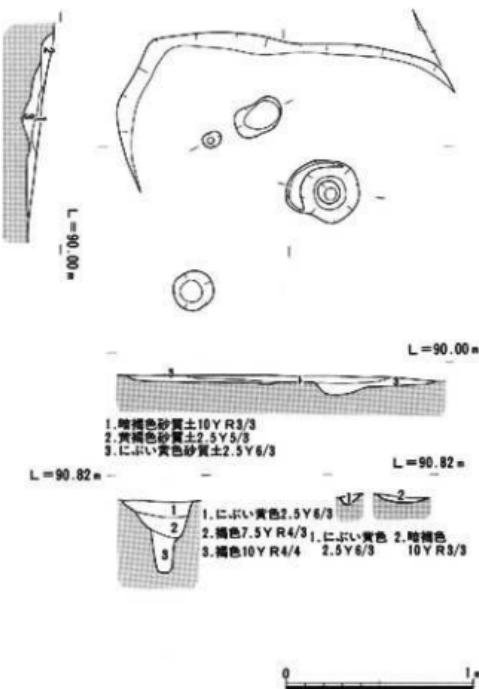


第26図 SK 1003出土土器実測図

線が三条巡らされている。口縁部の内外面は強く横ナデが施され、頸部外面はハケとヘラ磨き、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。85は口縁の形状は不明であるが、ヘラ磨きによる調整の施された筒状の頸部と胴部の境には凹線が巡らされている。86は小型の鉢形土器で、緩やかに内湾しながら上方に開く口縁部には凹線文が巡らされ、端部は内外に若干拡張されて平坦面が作り出され、一对のボタン状の貼り付け文とヘラによる刻み目が付けられている。87~90・91は高杯の杯部、92は脚台部の破片である。杯部は何れも口縁部との境に明瞭な稜線が作り出されるが、口縁の立ち上がりの形態によって88~90のように上方にはほぼ垂直に立ち上がるるものと、87・91のように斜め外上方に緩やかに開くものに大きく分けられる。口縁端部の形態によってさらに分類が可能で、特に87や90・91の形態のものは88・89に比べてより後期的な特徴をもつものであると考えられる。92の脚台の裾部は平行沈線とともに三角形の透孔があげられ、脚端部は上方にかるく拡張されて横ナデが加えられている。93~96は甕の口縁部の破片である。93~95は口縁端部が断面方形、96が上方に拡張される形

態のもので、観察可能なものは、内面のヘラ削りは何れも頸部との境付近まで施されている。

S B 1003の床面から検出されたS K 1003は、検出当初は住居跡に付随する施設とも考えられていたが、出土した土器、特に高杯を比較してみると時期的に若干の前後関係のあることが考えられる。S B 1003出土の53の水平口縁の高杯は窓内またはその周辺から搬入されたと考えられ、IV様式でも新しい段階のものとされるものであるがS K 1003の89のように口縁端部の外方への拡張が顕著なものや87・92のように口縁部が斜め外上方に開くものは中期最終末から後期に属する可能性が強いもので、S B 1003よりも若干後出する時期のものだと考えてもよいもの



第27図 S X 1001実測図

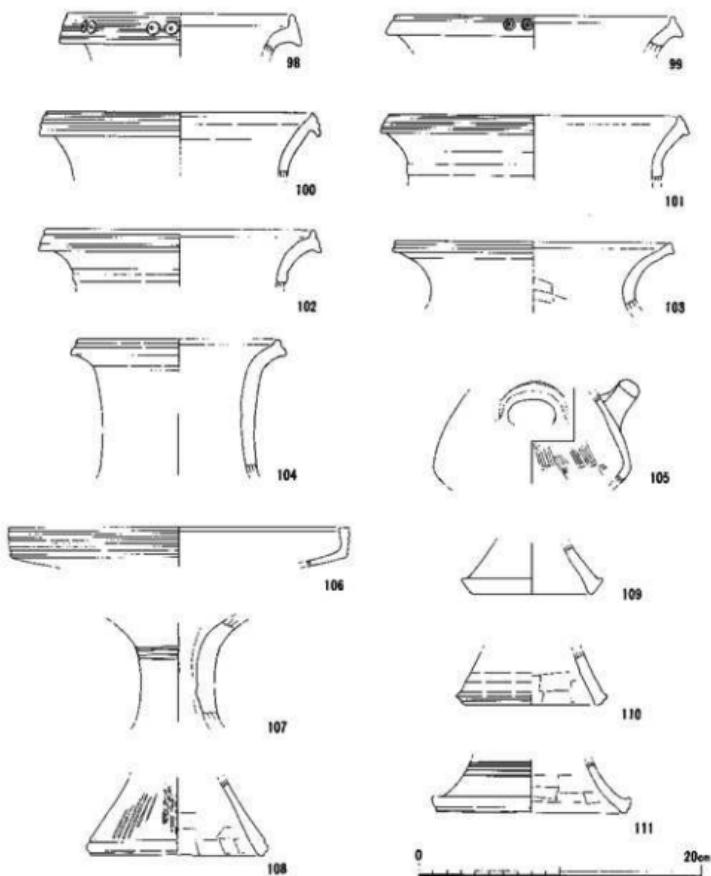
だとおもわれる遺物である。

不明遺構（S X1001）（第27図）

住居跡 S B 1001の西で検出された遺構で、緩斜面上の遺構検出面が表上から浅いためか削平が著しく、遺構北側の掘り方の一帯とこれに関連すると思われる大小のビット4個を検出しただけである。当初住居址の可能性も考えられたが他の住居址のように明確に炉址と認められるものが見あたらぬため、ここでは性格不明の遺構として扱っておく。出土遺物はまとまつたものは出土していない。

包含層出土遺物（第28～30図）

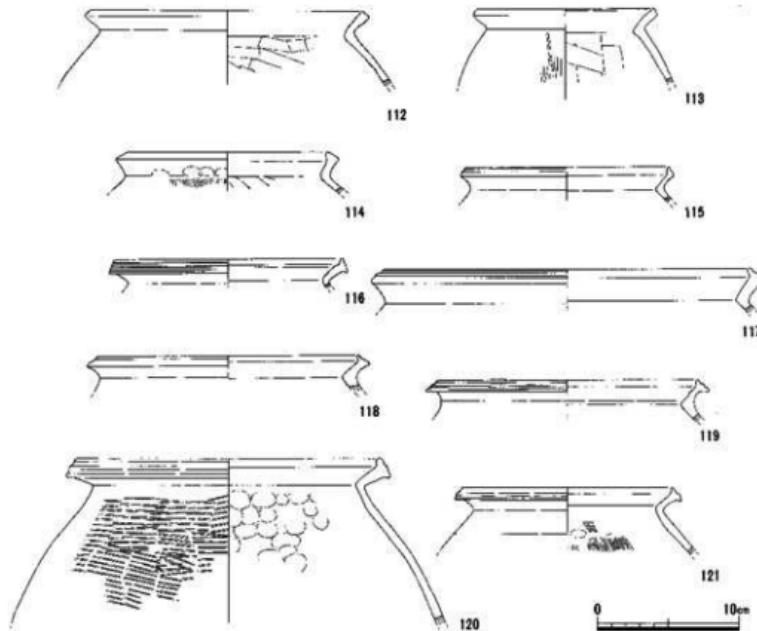
本遺跡は、基本層序の項でも述べたように段丘崖線上に調査区が設定されたために弥生時代といつても十層の堆積状況が不安定で、比較的安定していたのは旧石器と同様、埋没谷内に堆積したシルトからの出土遺物に限られている。また、弥生時代中期後半から後期初頭に限って言えば、この地域ではもともと遺構以外からの遺物の出土が少ないと認められている。このように包含層出土遺物の出土点数が限られているため、今回はそれ以外の耕作土や攪乱層からの遺物も含めて包含層出土遺物として報告する。98～104の壺形土器は広口壺と称されるものであるが、口径が20cm以下で頸部の細長い中型のものと、口径が20cm以上で太くて短い頸部がつく大型のものに分けられる。98・99・104は中型のもので、口縁端部は上方または上下に拡張され、凹線や円形浮文が付けられている。100～102は大型に分類されるもので、筒状の頸部から緩やかに外反しながら斜め外方に延びる短い口縁端部は上下に拡張され、凹線が巡らされている。また101・102は頸部にも太い凹線が認められる。いずれも口縁から頸部外面にかけては横ナデによって入念に仕上げられている。103は頸部の屈曲の度合いが強く、口縁端部は上方へ若干拡張されるだけで凹線も1条巡らされるのみである。調整は粗く、頸部内面にはヘラ削りが認められる。105は水差し形土器で、算盤玉形の胴部の肩に半環状の把手が付けられているが、破片のため口縁の形態などは不明である。また、遺存状態が悪く調整なども不明な部分が多いが、胴部内面に僅かにハケ目調整が観察できる。106は皿形の高杯の杯部で、直立する口縁部外面には凹線が巡らされ杯部と口縁部との境界は緩やかな稜線を形造る。107は同じく高杯の脚柱部で太い平行直線文が2条巡らされている。108～111の脚台には端部を上方に拡張するものと、まったく拡張しないものがあるが、拡張された端部には凹線が付けられるものと、横ナデのみで仕上げられるものがある。また、111のように据部に平行直線文が加えられた例もある。何れも外面はヘラ磨きまたはナデ、内面はヘラ削りで仕上げられている。112～121の甕は、口縁端部の形態によって口縁の断面が方形または丸みをもった形状に仕上げられただけで端部が拡張されないもの、



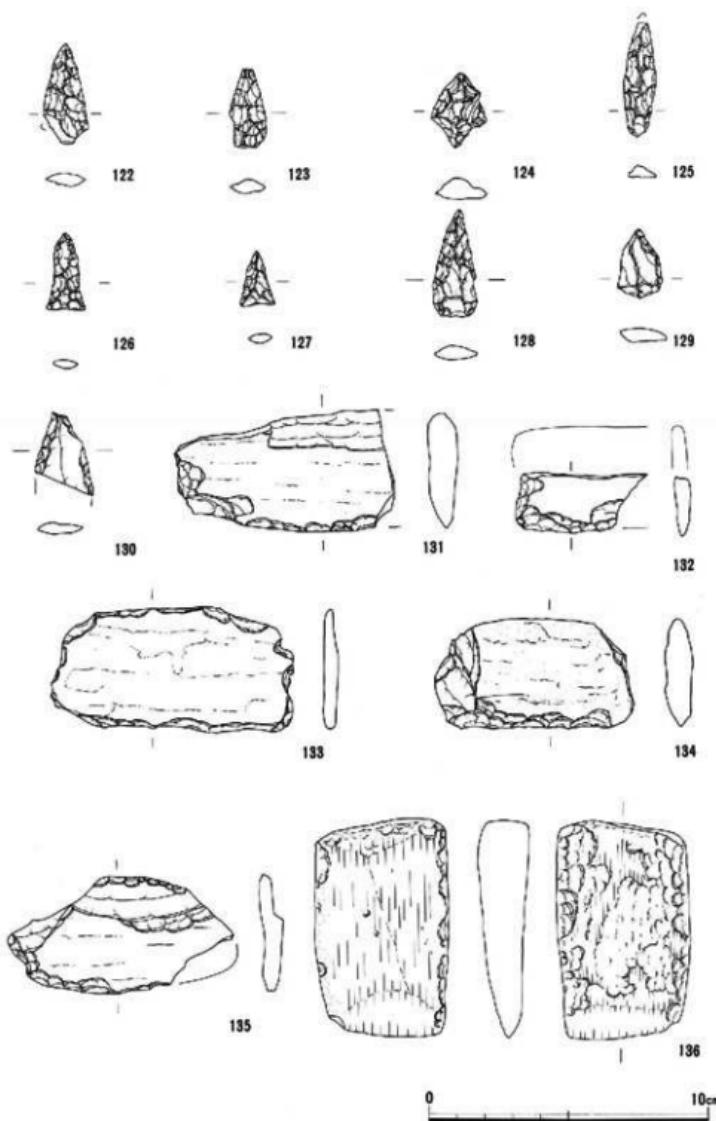
第28図 包含層出土土器実測図

端部が上方のみに拡張されるもの、端部が上下に拡張されるものの3種類に分類される。112・113は端部が方形またはそれに近い形状のもので凹線は認められず、内面のヘラ削りは頸部との境まで施されている。114・115は口縁端部が上方に拡張されるもので、114では端部には凹線が認められないが115は1本巡らされている。2点とも頸部以下の残りが悪く形態・調整なども殆ど不明だが、114では僅かに残された胴部部分にハケ目とヘラ削りが認められる。

られる。116～121は口縁端部が上下に拡張されるもので、拡張の程度は様々であるが端部には何れも凹線が認められる。また、114・115と同じく頸部以下の形態を観察できるものは少ないが、比較的遺存状態のよい120では外面は幅の広い粗い平行叩きが、内面には指押さえがそれぞれ頸部との境まで施されている。121の場合は外面はナデ調整、内面は指押さえの後にハケ目調整が施されている。通常、口縁端部を上下に拡張する型で外面に叩き目が加えられるものは、叩き目の上にさらにハケ目調整やナデが施される場合が多いが120の場合はそのまま残されている。叩き目の形状とともに特異な例である。122～129はサヌカイト製の打製石鎌でそれぞれ122～124が凸基有茎式、125・128が凸基無茎式、126・127が凹基無茎式に属する。129・130はサヌカイトの剥片の側縁に調整を加えたもので石鎌の未製品と考えられるものである。131～135の打製石包丁は両端に抉を加えたもの（132～133）と抉を持たないもの（134・135）が出土している。136は扁平片刃石斧で蒲鉾形の断面をもつ身部には成形の際の敲打痕が多く残されている。



第29図 包含層出土土器実測図



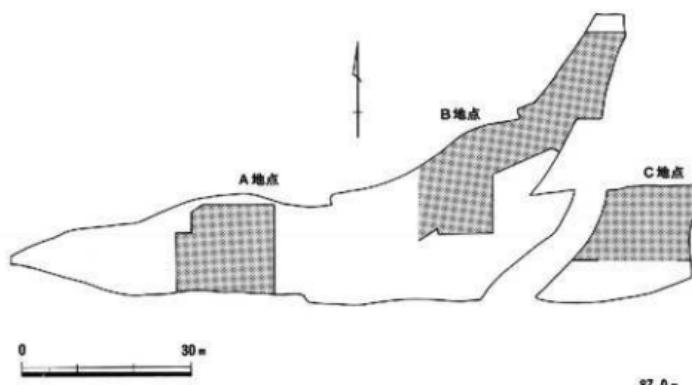
第30図 包含層出土石器実測図

旧石器時代の遺物（第33～49図）

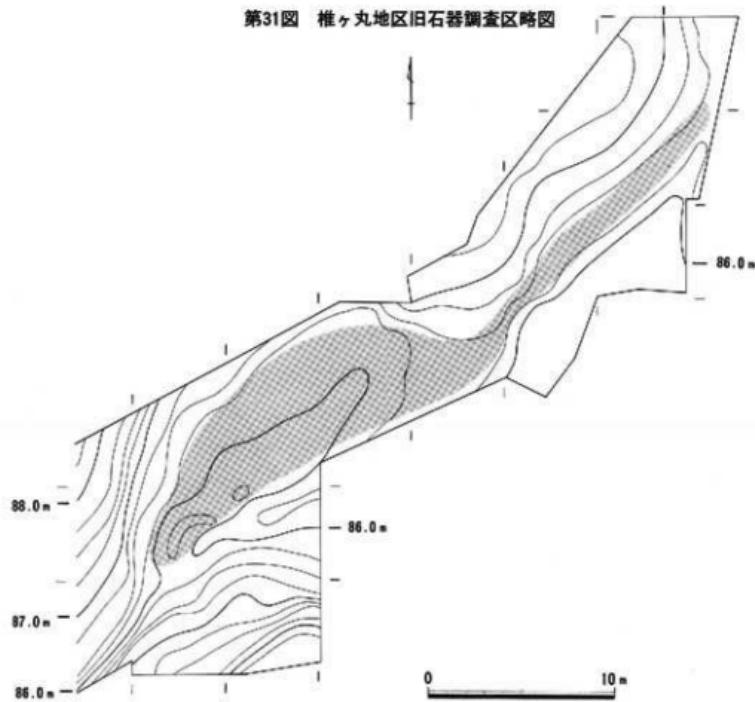
今回、報告する旧石器はⅠ区で検出された2箇所の埋没谷状地形内に堆積したシルト層と東側の牛屋谷に面したⅡ区の段丘面上に堆積した段丘礫層を中心に出土したものである。何れの層も堆積状況が不安定で、その層中に含まれる石器も原位置を遊離している可能性が強い遺物である。この3地点を西から仮にA、B、Cの記号を付け、周辺から出土した遺物も交えて説明することとする。

A地点出土遺物（第33～39図）

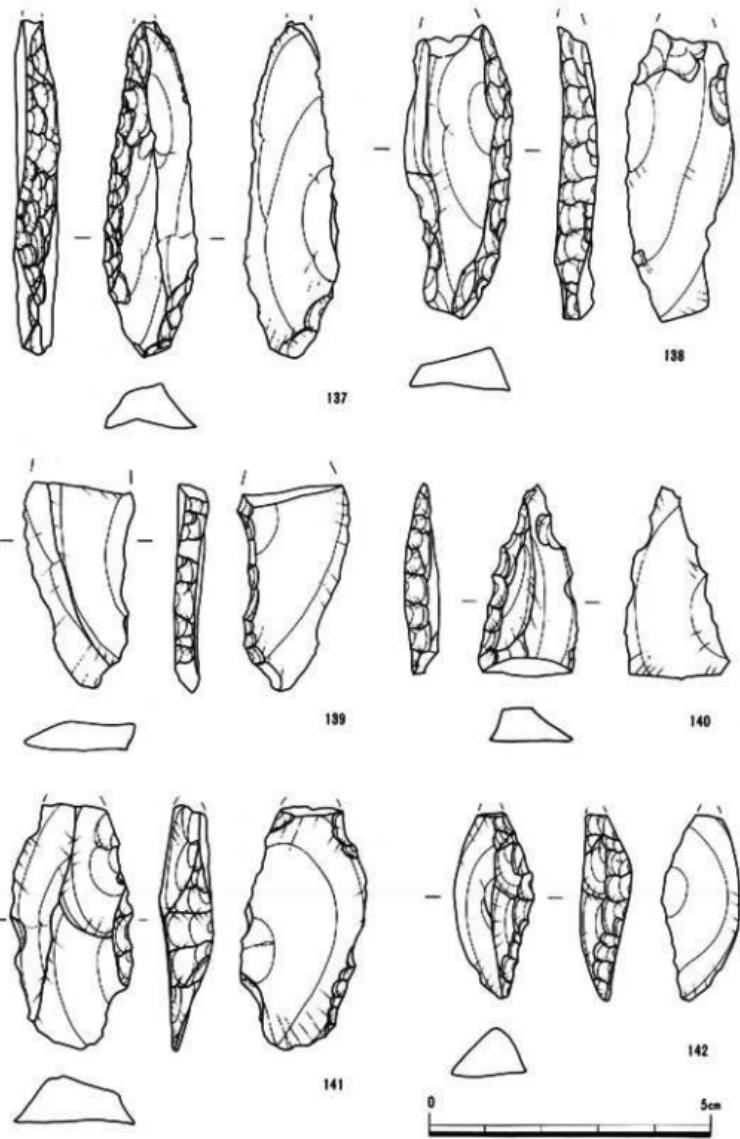
A地点とその周辺からは、ナイフ形石器や、削器、石核などを含む遺物が出土している。137は背面に2枚のポジティブな剥離面が残る横長の素材を用いたナイフ形石器で、調整剥離が片側縁のほか刃縁部側の一部にも施されている(2)。138・139は背面が1枚のネガティブな剥離とポジティブな剥離面によって構成される翼状剝片を素材とするナイフ形石器で、調整の方法は138が137と同じく片側縁と刃縁部側に施されているのに対して139は片側縁に施されるだけである。140～144はいずれも背面が複数のネガティブな剥離面と1枚のポジティブな剥離面により構成される横長剝片が素材として用いられ、調整は片側縁にだけ認められる。145・146は同じ片側縁に調整を施す横長剝片を用いたナイフ形石器ではあるが、背面は1枚のネガティブな面のみによって構成されている。147・148も横長剝片を素材とするが、調整は一部を除いて周縁部全面に加えられたタイプのナイフ形石器である。147の横長剝片は背面と打面の一部にそれぞれ自然面を残している。149は翼状剝片の側縁部に簡単な調整を加えた刃部としたナイフまたは削器と考えられる石器で、素材となる翼状剝片の一方の側縁には自然面が残り、もう一方には簡単な調整が施されている。150～155は何れも比較的厚みのある剝片を素材とする削器または搔器と考えられる石器である。150は、背面と腹面の両方からの加撃によって打点を除去した剝片に調整を施した削器である。151は背面が自然面と複数のネガティブな剥離によって構成される剝片から打面を除去し、縁辺部に調整を加えた削器または搔器と考えられる石器である。152も厚みのある剝片の打点を取り去り、縁辺部に調整を加えて搔器としている。153は複数の加撃によって打瘤が取り去られた腹面から、背面に向かって縁辺部全体に調整を加えて搔器としたもので、円みをもった刃部が作り出されている。154・155も150～153同様の特徴を持った石器であるが、155は他と異なり素材となった剝片の打面がそのまま残されている。154の素材となった剝片の背面は複数のネガティブな剥離面が認められる。また、156も簡単な調整を側縁に加えただけの削器であるが、素材には横長剝片を取ったと考えられる剝片を用いた石核が転用されている。158～163は横長剝片、164は調整剝片である、161は一見翼状剝片に類似しているが、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面が1枚ずつ認められる。また165は背面がネガティブ



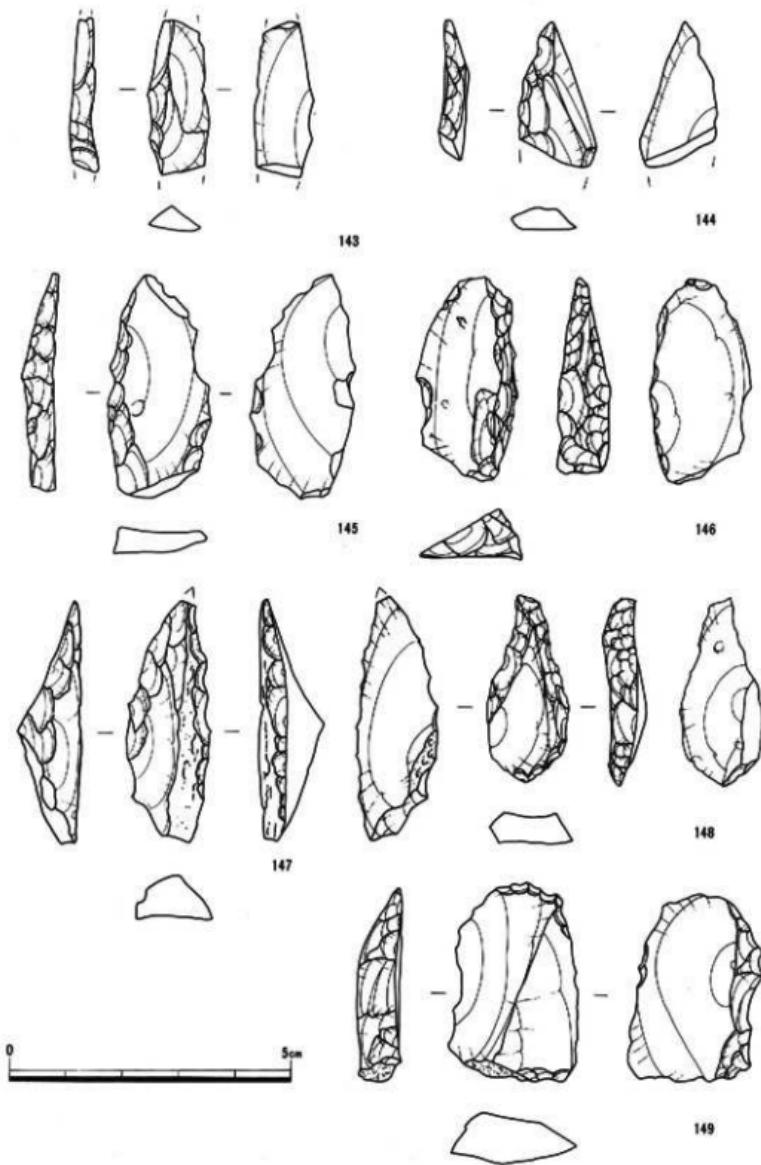
第31図 椎ヶ丸地区旧石器調査区略図



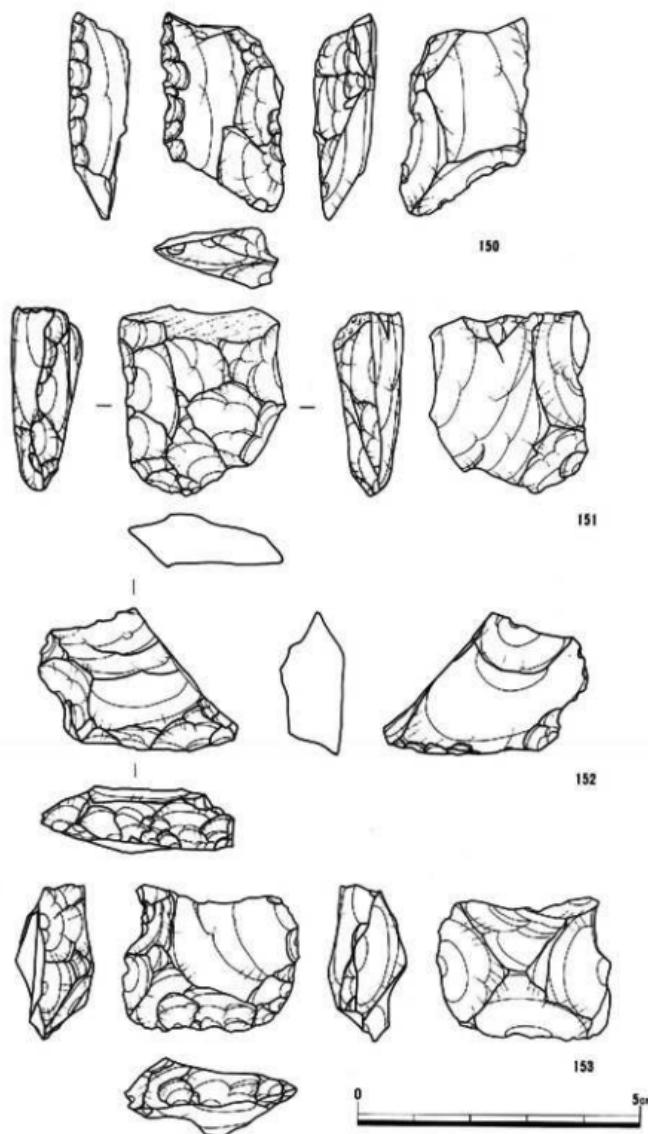
第32図 B地点埋没谷状地形測量図



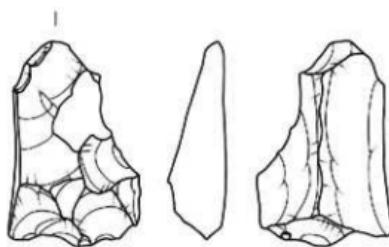
第33図 A地点出土旧石器実測図



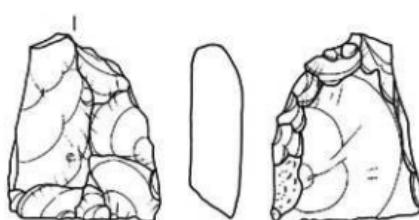
第34図 A地点出土旧石器実測図



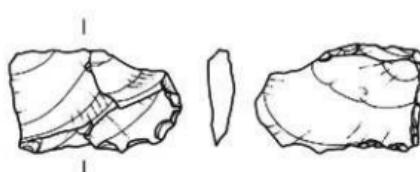
第35図 A地点出土旧石器実測図



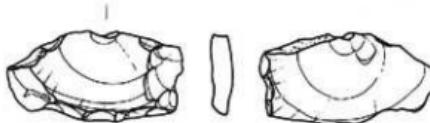
154



155



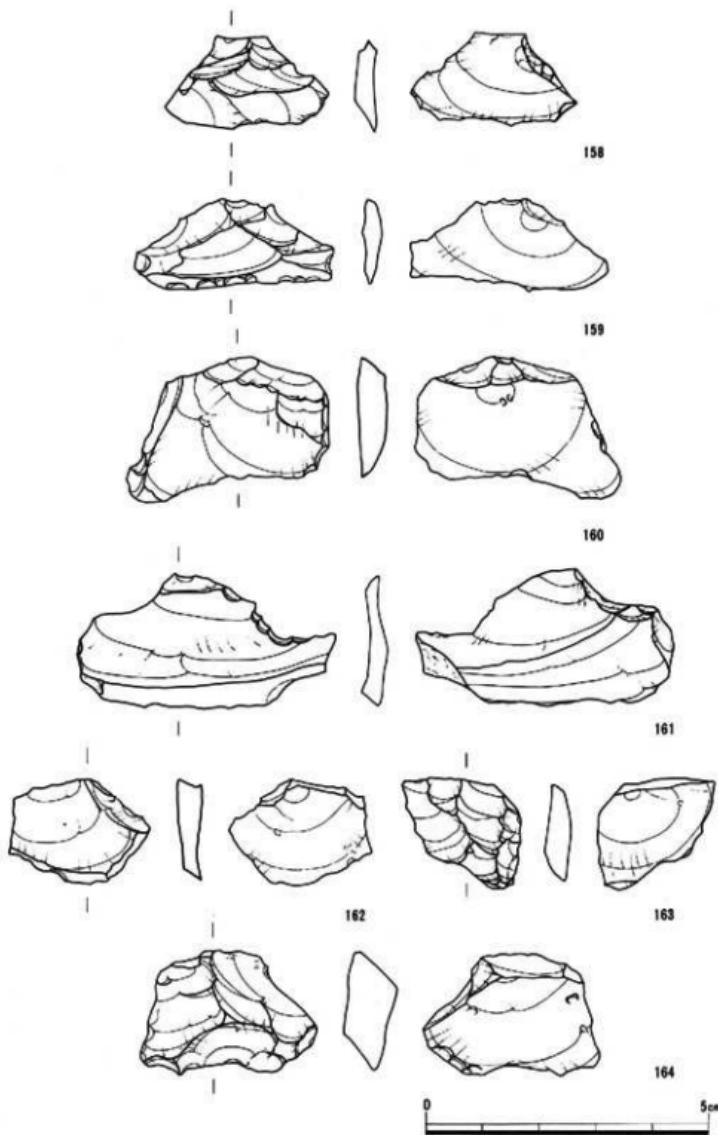
156



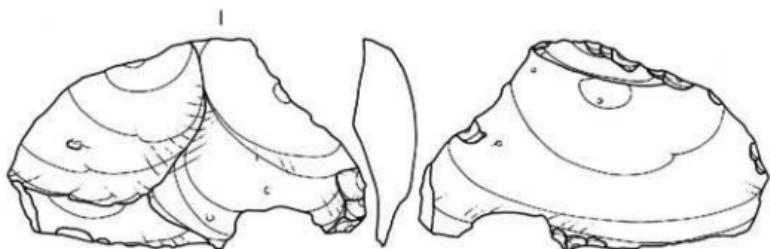
157



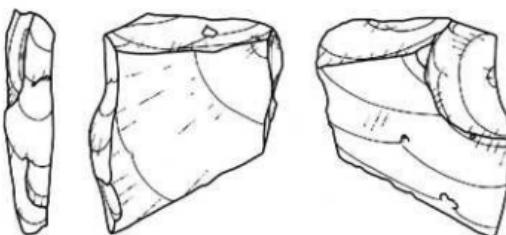
第36図 A地点出土旧石器実測図



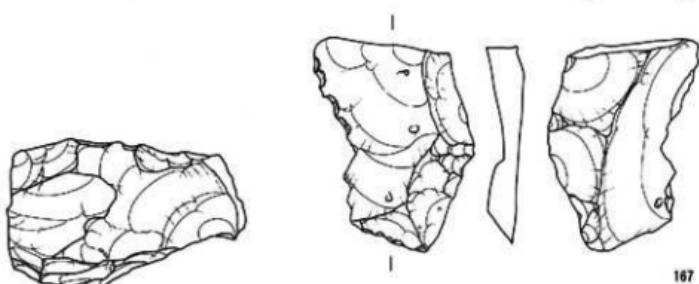
第37図 A地点出土旧石器実測図



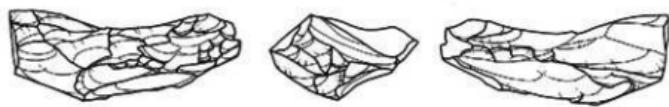
165



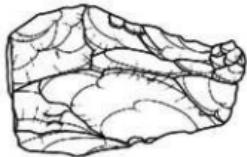
166



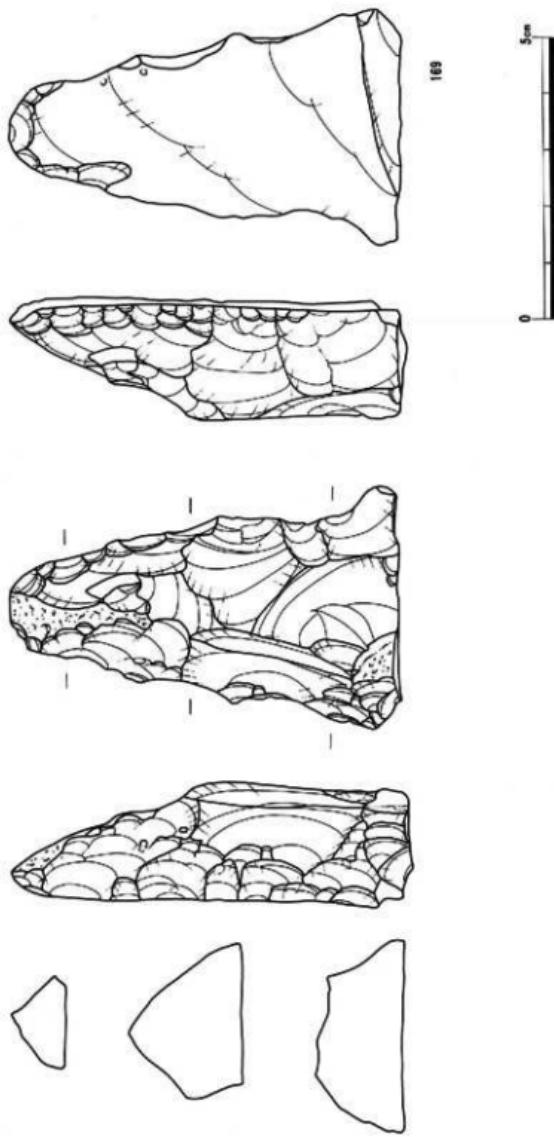
167



168



第38図 A地点出土旧石器実測図



第39図 A地点出土旧石器実測図

な剥離面2枚とポジティブな面1枚によって構成される大型の剝片である。166～168はいずれも横長剝片石核と考えられるものである。166は腹面側に、167では腹面と背面の両方にそれぞれ剝片を剥離した痕が残されている。168は複数の剥離面によって構成される打面から背面側に向かって剥離作業が行われている。169は大型の角錐状石器である。背面に自然面を残す大型の剝片を素材とし、側縁部に腹面から背面に向けて調整を加え形状を整えている。また、腹面の先端にも簡単な調整がおこなわれている。

B 地点出土遺物（第40～45図）

A地点同様、埋没谷状地形の堆積の中からナイフ形石器を中心とする石器が出土している。170～174は翼状剝片を素材とするナイフ形石器である。170～172は調整が片側縁のみに施されているが、173には簡単な調整が刃縁部側にも加えられている。174は非常に大型のナイフ形石器で、上半部を欠失するがそれでも残存部の長さは6cmある。残された下半部の側縁と刃部には全て調整加工が施されているが、刃縁部側の調整の範囲は欠損しているため不明である。175のナイフ形石器の背面には複数のネガティブな剥離面と1枚のポジティブな剥離面が残され、片側縁に腹面からの調整が施されている。176～181は横長剝片を素材として用いたものであるが、176・177は背面が1枚のポジティブな剥離面によって構成される横長剝片を素材としており、145・146の資料同様、ネガティブな剥離面が調整によって除去された翼状剝片の可能性もある。176は刃縁部側の中央部から開始された調整によって先端部が円く仕上げられている。177も刃縁側に調整が加えられているが基部近くで調整の加えられる方向が逆になっている。178・179は背面が複数のネガティブな剥離面で構成され、両側縁の調整がほぼ全体に及ぶもので、179は177同様、基部付近で調整が逆に加えられている。180は背面が1枚のネガティブな剥離面で構成される横長剝片を用いるナイフ形石器または削器と考えられるもので、片側縁には腹面から、刃縁部側の一部には背面側からの簡単な調整痕が認められる。181はナイフ形石器の身部中央付近の破片で、横長剝片を素材とし、背面には方向の異なるネガティブな剥離面が残され、両側縁には調整が認められる。182～187は削器または搔器と考えられる石器である。182は打面調整の際に生じたと考えられる大型の剝片を用いたもので、側縁部にはネガティブな剥離面が残され、その上に簡単な調整が施されている。183は大型の横長剝片の縁辺部に腹面から背面に向けての調整を加えて刃部を作出したもので、部分的にノッチ状の抉が施される。184はチャート製の縦長剝片の片方の側縁に簡単な調整を加え刃部としたもので、打面は未調整の自然面をそのまま使用し側面には縦長剝片を剥ぎ取った複数のネガティブな剥離面が残されている。185は打痕を除去した小型の薄い横長剝片に簡単な調整が加えられている。186は横長剝片石核に粗い調整を加え削器としているが、3枚のネガティブな剥離面によって構成される腹面から、背面にむかって横長剝片を剥ぎ取った痕

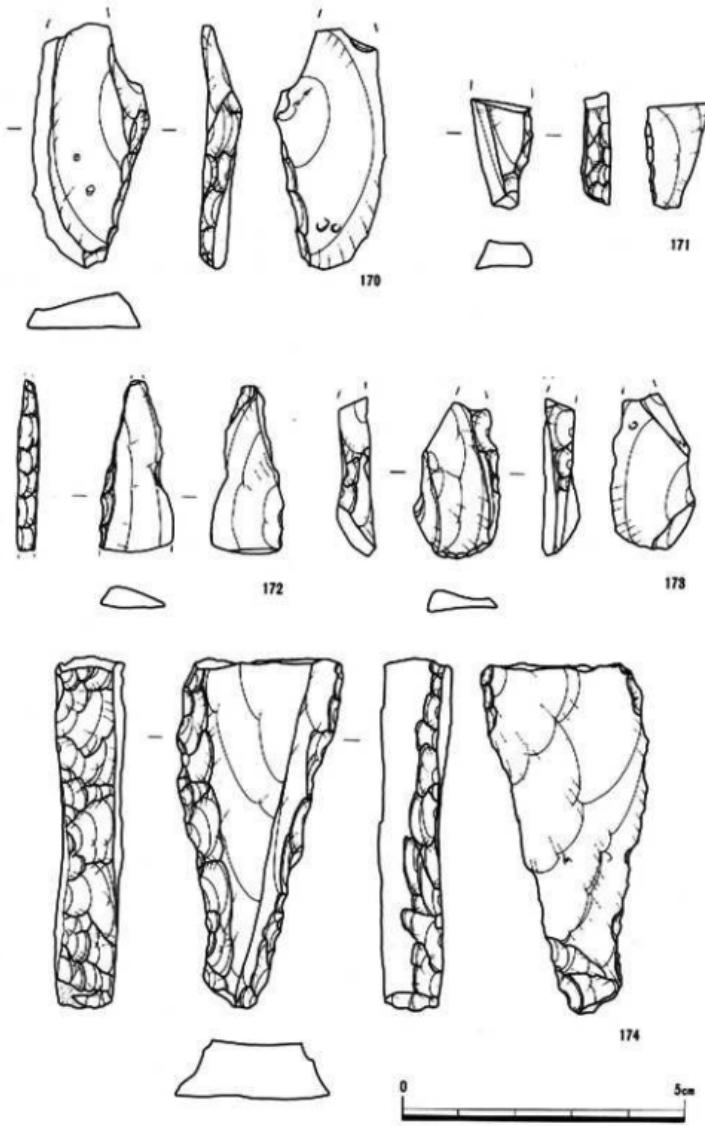
跡が残されている。187は背面と腹面にそれぞれ1枚のネガティブな剝離面とポジティブな剝離面が残された大型の盤状の剝片の縁辺部に、腹面から背面にむかって粗い調整を加えて鉛歯状の刃部を作出し搔器としたものである。188・189はともに楔形石器に属するもので、189はチャート製の小型の製品である。190～195は横長剝片、196・197は縦長剝片で、いずれも背面はほぼ同一方向からの加撃によって生じた複数のネガティブな剝離面によって構成されている。198～200は調整剝片で、背面に残された複数の剝離面の加撃の方向は一定していない。201は横長剝片石核で、素材に背面の一部に自然面を残す厚い剝片を用い、剝片の剝離作業は全て腹面側から背面に向かって行なわれている。用いられた素材の形状や石器の形態は角錐状石器に類似している。

C地点出土遺物（第46～48図）

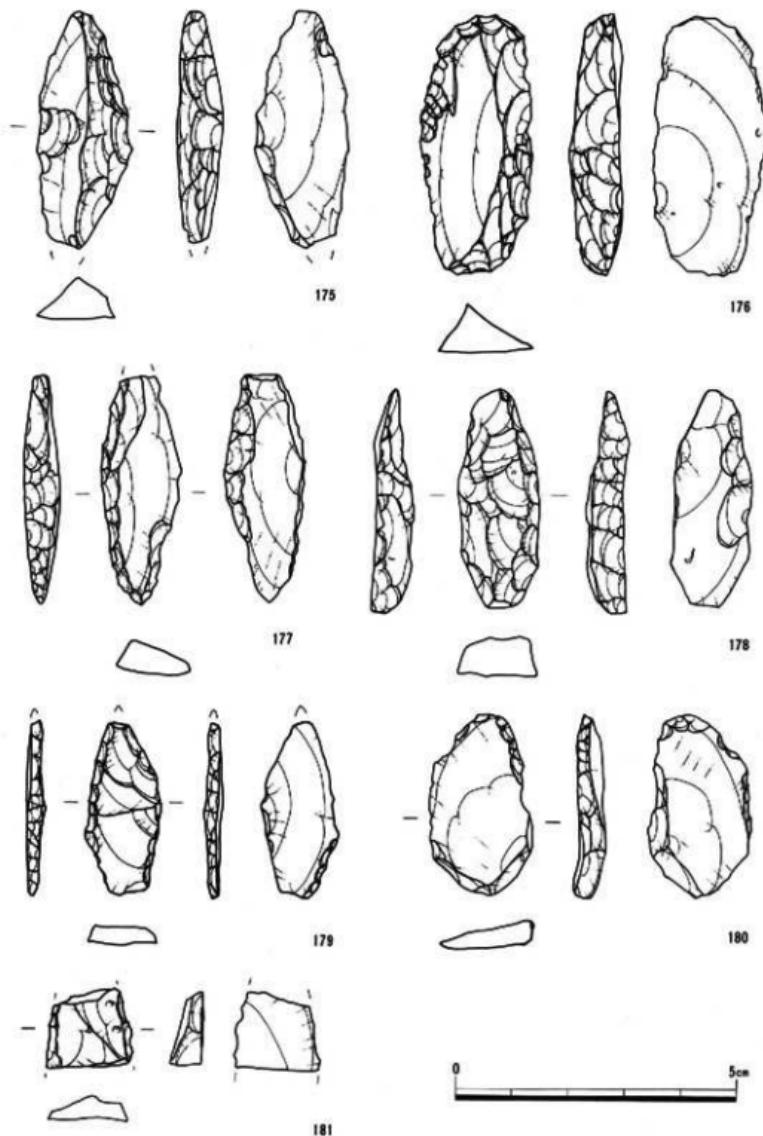
牛尾谷に沿って南に張り出す段丘岸上に堆積した砂礫層中から出土したもので、3地点のうち最も上層が不安定で礫層中には何枚かの流れの痕跡が認められた。石器の出土は3地点のうち最も少なく、ナイフ形石器も1点しか出土していない。

202のナイフは翼状剝片を素材とするもので、基部を欠失しているが現存する部分だけで長さが6cmある大形のものである。調整は片側縁のみに認められる。203～206は削器または搔器に属する石器である。203は背面に複数のネガティブな剝離面を残す調整剝片と考えられる素材の2側縁の一方には背面から、もう一方には腹面から調整が加えられている。208は151や153同様、打面を除去した厚みのある剝片の縁辺部に調整を加えて削器または搔器に加工したものである。205は背面がネガティブな剝離面と自然面を残す厚みのある偏平な剝片の一側縁に調整を加えたものである。206は背面に自然面を大きく残した剝片の腹面に何回か加撃を加えて打点を除去した後、側縁部に腹面から背面に向けて粗い調整を加えて刃部を作出している。207～213の剝片のうち、翼状剝片と考えられるものは207だけで、他は縦長剝片や調整剝片などがそれぞれ數片づつ出土しているだけである。

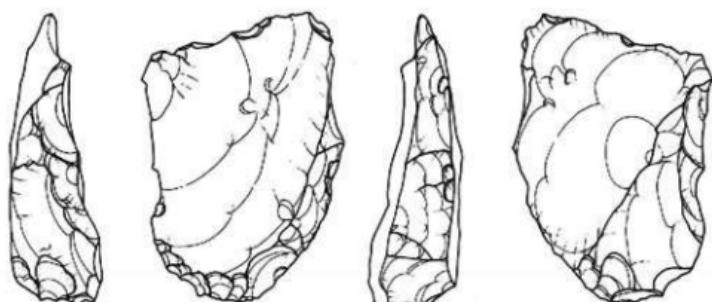
この他に、調査区に隣接する地域から調査中に何点かの遺物が採集されているので合わせて報告することとする（第47図）。3点採集されたナイフ形石器のうち、214は翼状剝片を素材とするナイフ形石器で上半部を欠失する。調整は片側縁のみに施されている。215・216は共に小形の横長剝片を用いたもので、調整は215が片側縁だけであるのに対して、216は刃縁部側の基部と先端部にも加えられる。217は細長い横長剝片石核の残核と考えられるものの側縁部に簡単な調整を加えて石器としたものである。218は背面が自然面と複数のネガティブな剝離面で構成される剝片の周辺に、腹面方向からの調整を加えて削器としたものであるが、他の削器に度々認められる打瘤の除去は行われていない。



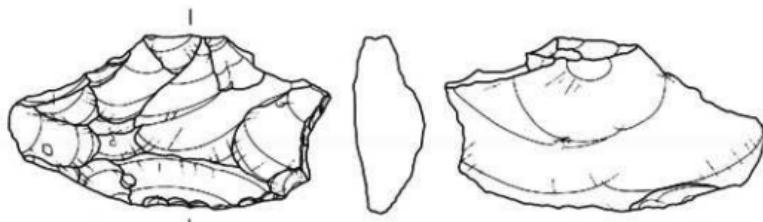
第40図 B地点出土旧石器実測図



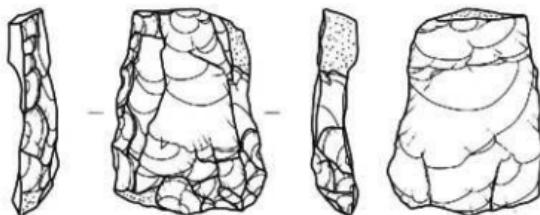
第41図 B地点出土旧石器実測図



182



183



184



第42図 B地点出土旧石器実測図